

---

# 非現実の現実

蒼炎鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非現実の現実

### 【Nコード】

N7453A

### 【作者名】

蒼炎鬼

### 【あらすじ】

これは、運命を変えられた者達の物語

## 第1話：日常（前書き）

以前同じものを書きましたが都合により改正させていただきました。

## 第1話：日常

くだらない・・・)

僕は、机に肩肘をつきながら思った。

(数学の方程式に何の役に立つ？歴史を振り返っても人間は同じ事しかない)

だが、国語の授業中に考えても仕方が無い。

キンコンカンコン (このチャイムはどうにかしろよ・・・)  
どう考えてもリズムがずれているチャイムが鳴る。

「起立。礼」

授業が終わった。その矢先に、

「蓮崩 れんほう ちよつと来い！」

俺の名前だ。

「お前、進路はどうするんだ？お前ただぞ。決まってないのは！」  
先生が怒りながら言う。

俺はもう中3だ。3年にもなって、進学先も考えずに遊んでいる。

いわば、落ちこぼれだ。

「ああ。そんなことすか」

俺は他人事のように言う。すると。

「そんなことだと！ふざけるなよ！」

先生がキレた。先生の怒号が教室内に響きわたる。

(そんなことでキレんなよ・・・)俺は呟く。

「もういい！先生はお前の進路には一切干渉しない。わかったな？」

「はあゝい」

俺は馬鹿にしたように言う。

まあ、実質本当に進路は決めねばと焦っているのだが、俺はあの先生が嫌いだ！

「先生どうしよう？」

なんて聞くなら死ぬ！

「ダイジョブ？蓮崩」

話し掛けてきたのは、幼稚園からの幼馴染の聖 しょう だ。名前は男みたいだがれっきとした女。俺もお年頃なので、女には興味が湧いてしまう

「まあな。ったくあのオヤジすぐ切れやがって！」

俺は先生に対しての愚痴を言う。すると

「いや、あれは蓮崩が悪いと思うわよ？」

聖が言う。

「う・・・まあそうかもしれないけど」

なぜか、聖には嘘はつけない。と言うより逆らえない。

幼稚園の時に一度逆らったら・・・

・・・あれは封印しておこう。

「ああゝ。なんか面白え事ねえかなゝ？」

この何気ない言葉が、俺の運命を変えることになる。

## 第1話：日常（後書き）

この小説を読んでのご感想をお待ちします

## 第2話：不安

「聖!!」

大声を出して俺は起き上がった。

「わっ!!なに!!?」

俺と同じ年くらい女の子が驚いてこっちを見る。

「あれ?俺なんでこんなところで寝てんだ?確か・・・」

俺は、なぜここで寝てるのかを思い出す。

「なんか、面白えことねえかなあ?」

と思った。そしたら教室が夜でもないのに暗くなって。気づいたら、どっかの平原に落ちてて・・・

(そこからどうなった?)

俺が思い出してる最中に女の子が話けてきた。

「ダイジョブ?」

女の子は心配そうに話す。

「頭がフラフラする・・・」

俺は意識もまだハッキリしていない。

「はい。水」

女の子は水を渡してきた。

「ありがと・・・!!!!ニガッ!!なんだこの水!!!?!」

あまりの水の苦さに吐き出す!

「アハハッ ホントに飲むなんてね」

女の子は無邪気に笑う。

(この女・・・泣かすぞ!!!)

これが、俺の頭に思ったこの女の子の第1印象だ。

「あ、そうだ。あたしはプエル。あんたは?」

「蓮崩・・・」

怒りを抑え話す。「レンハウ・・・珍しい名前だね」  
プエルは虎視眈々と話す。

（珍しい？おれからすりゃ、プエル って名前が珍しいけど・・・）

（ここって、外国か？）

様々な事が頭に浮かぶ。

「ところで、なんでレンホウはトルナ草原に倒れてたの？」

プエルが言う。

「トルナ草原？なにそれ？」

俺は、意味がわからずプエルに聞く。

「え・・・？嘘でしょ？？なにつて・・・」

プエルは驚きの表情を隠しきれていない。

「いや、だからトルナ草原ってさ・・・」

俺は聞き返す。

「もしかしてあんた、異界人？」

プエルが困惑の表情で俺に聞く。

「は？バカ？俺は日本人」

おれは、すぐさま言い返す。

「ニホンジン？あんた、レヴェル人じゃないの？」

プエルが言う。

「は・・・？」

気まずい沈黙が二人を囲む・・・



### 第3話：クローマー

いまだに、長い沈黙が続いている・・・

（そっぴゃ、この世界の仕事ってどうなってんだ？）俺がそう思った矢先にプエルが口を開いた。

「そっぴゃ、レンホウ。あんた仕事はどうするの？」

「どうするの？っていわれてもどんな仕事があるんだよ？」

俺はどんな仕事があるのか知リたかつた。

「そっね。炭鉱堀 ・ ハンター ・ 殺し屋・・・」

（ちよつと待て！！殺し屋！！？それ仕事か！！？）

俺は口に出そうとしたが、言わなかつた。

「そっだ！才能の問題もあるけど、クロームは？」

「くろーむ？なんだそれ？」

「簡単に言つと請負人かな？当事者ができないしことを変わりにやつて報酬をもらつ仕事」

そのときの俺は、この仕事が危険という事に気づいていなかつた。

「なんでそれだけなのに才能がいるんだ？」

「この仕事って結構ハイリスクなんだよね・・・。竜討伐やらにやらがあるし」

（この世界には竜がいるのか・・・興味深いかも）

「んん・・・じゃ、やつてみるかな」

俺は、心のうちではやる気満々なのだが、そこを抑えて冷静に話す。

「よし！キマリ！じゃ、登録だね。クロームハウスに行くよ」

俺はプエルに従つて外に出た。

「へえ・・・」

俺は外の景色に驚いた。俺がいた世界 日本 とほとんど変わらな  
い普通の世界だったからだ。

「ほらほら、こっちこっち！」

プエルが俺の手を引っ張る。少し行った先には、大きな屋敷みたいな建物があった。

「ここがクロームハウス。どう？」

「どう？ってデカイな・・・」

この大きさは、俺の世界でいう、大富豪の屋敷みたいな大きさだった。

そう思っているうちにプエルが1人で中に入っていた。

「新しいクロームを登録したいんですけど」

プエルは受付の男に言う。よく見ると、男は生きていなかった。死人のような体・人形のような目。

俺はその男を見て、寒気がした。

その男は俺に、

「名前は？」

と聞いてきた。

「あつ。蓮崩です」

「レン・ホウ様ですね。承りました。所有武器は？」

感情が無い機械のようなしゃべり方で男は聞いてくる。

「所有武器？」

俺はなんのことかわからなかった。

（合剣って言いなさい。後で使い方教えるから）

プエルが耳元で囁く。

「所有武器は？」

男は聞いてきた。

「合剣です」

「承りました。登録が完了するまでお時間を頂きます。少しお待ちください」

「ふう。終わったわ。後は、少し合剣の訓練をして、それからあたしとあんたともう1人で仕事に行きましょう」

プエルが緊張している俺に言う。

「ああ。わかった。頼むよ」

俺は登録が終わるまで何をしようか考えていたらふと、聖　しょう  
の顔が頭に浮かんだ。  
（聖・・・元気かな？）

## 第4話：異世界の人（前書き）

今回は蓮崩の幼馴染、聖の立場の話です。

#### 第4話：異世界の人

教室が明るくなった。

「あ、明るくなった。蓮崩ダイジョブ？」

あたしは蓮崩を真つ先に気にした。何でだろう？

「・・・蓮崩？」

あたしはビックリした！蓮崩がいなかった！

「ねえ！だれか蓮崩を見た人いない？」

あたしは教室の中にいる人全員に聞こえるように大声で言った。

「レンホウ？だれだ、それ？そんな奴クラスにいないぜ？」

「え！？だって、さっきまでクラスにいたじゃない？」

「ていうか、そんな名前の奴なんかこの学校にいないぜ？」

教室の男子が言う。

（どういうこと？みんなが蓮崩の事を忘れてる・・・）

あたしが考えている時に学校の放送が鳴った。

【原因不明の停電が起きました。電気系統整備のため今日の学校は終了します】

「「やったぜ！！」」

生徒は皆喜んだ。

だけど、私だけは喜べなかった。

（蓮崩どうなったの？）

あたしは不安でいっぱいだった。

とりあえずあたしは、学校が終わったので病院に行くことにした。

あたしは生まれつき左足の骨が弱い。そのために家では松葉杖を使っている。けれど、運動神経だけは、男子より高い。

「うん。いい感じね。あまり無理はしてないみたい」

病院の先生は安心そうに言う。

「ありがとうございます・・・」

「どうしたの元気ないけど？」

「いえ幼馴染が急にいなくなっちゃって・・・」

あたしは泣きそうな顔をしていたらしい。

「それは、気の毒に……。でも、そんなときだから明るくなりましょう！」

先生は励ましてくれた。

「ありがとうございます」

あたしは、お礼を言っただけで病院を出た。お金はお母さんが先に払ってくれている。

（明るくしろって言ってもな・・・）

あたしが悩みながら帰っていると、目の前に紳士風の老人がいた。

「お嬢さんは レンホウ という名前を知っているかな？」

「蓮崩！？知ってるわ！」

あたしはビックリした。

誰も覚えていないはずの蓮崩のことを覚えている人がいたから。

「そうですか。ならば・・・」

老人は近づいてきて、持っている杖をあたしのお腹に突きつけた。

「むん！！！」

老人がそういつた瞬間あたしは吹き飛んだ！

「なっ！」

あたしは吹き飛ばされながら、右足を地面に付けブレーキをかけた。

「ほう、なかなか強い娘さんだ」

老人はいつのまにかあたしの背後にいた。

「いずれまた会うでしょうそれまで。私は 異世界の人間 さ」

（異世界！？そんな世界ホントにあるの？）

あたしは困惑した。

「言い忘れていましたが、私の名前はキヨウリム。キヨウリム・ネルスです。では、また会いましょう。お嬢さん」

キヨウリムという老人は空間を裂いて消えた・・・

（蓮崩。何処にいるか判らないけど、無事でいて!!）  
あたしは蓮崩の無事を祈りながら家に帰った。

## 第5話：魔導習得

「レン・ホウ様登録が終了しましたので、こちらにお越しく下さい」

「ほら！レンホウ。早く！！起きて！」

俺はいつのまにか寝ていた。

「んあ？なんだよ？」

俺は寝ぼけながら言う。

「いいかげんに起きなさい！！・・・殺すわよ？」

（う・・・このプレッシャー！聖そつくりだ！）

俺はプエルと聖の性格が少し似ていると思った。

「わかった。すぐ行く」

俺は眠たい目をこすりながら受付に行く。

「どうぞ。これがあなたのクローム用の携帯電話です」

受付の男は番号（8403）付きの携帯を渡してきた。

「なんだ？この番号？」

「これはあなたのクロームナンバー。この電話に依頼が入ってくる

こともあるわ」

プエルが親切に説明してくれた。

「入ってくることがある？どういうことだ？」

「大体はここに來て依頼を確認していくの。」

（なるほど。納得）

俺がプエルと話していたら、受付の男が話を割って入ってきた。

「レン・ホウ様のクラスはFですので、手伝い任務 しかできません」

「手伝い任務？」

俺は男にではなくプエルに聞いた。

「手伝い任務ってのは、子供のお守りとかのこと」

「しょぼ・・・」

俺は氣落ちした。



「最初は誰でもそんなものよ」

プエルが慰めてくれる。

「けど、あんたにはCクラスの任務を最初に見せるわ。付き添いならクラスは自由に選べるの」

「付き添いつて誰の？」

「あ・た・し」

プエルはにやりと笑ってこっちを見る。俺は寒気がした。

「プエルもクロームなのか？」

俺は、そうじゃないほうがいいと思いつつ聞いた。

「あたしは、Cクラスよ」

「へえ・・・」

俺は微妙な返事を返した。

「まあ、いいわ。とりあえず、あんたの剣の訓練をしないとね！」  
そういつて、プエルは外に出て行く。俺も後に従った。

街中を歩いてると、プエルが携帯を取り出した。よく見ると、番号が書いてある。クローム用の携帯だろう。

「あ、ガイル？あたし。ちょっと、トルナ草原に来て？」

プエルは ガイル という奴に電話をかけていた。

（トルナ草原つて、俺が倒れてた草原だよな・・・）

俺が、思い出してる時にプエルが話し掛けてきた。

「そっぴゃ、あんた レヴェル人 じゃないのよね？じゃ、  
魔導  
も・・・知らないんだよね？」

俺はうなずいた。

「はあ・・・これは前途多難ね・・・」

プエルは大きなため息をつく。そう話している間に俺たちは町を抜け草原に来ていた。

（ここがトルナ草原・・・）

「もうそろそろガイルがくるはずだから、それまで・・・」  
プエルが独り言を言っている。

「！そうだ！！ 魔導式 を書いておきましょう」

（またわけがわかんねえ単語が・・・）

そう思っていたら、プエルが俺のもとに近づいてくる。

「レンホウ、腕出して」

「腕？ああ。ほら」

俺は片方の袖をまくり腕を出す。

「ちょーつと痛いけど、我慢しなさいよ？男なんだから」

「・・・は？それどういうこと？」

俺が聞いているのにプエルは無視している。

「今この者に新たな力を、偉大なる第8賢者クリスの名において誓う」

プエルは静かな声で言う。

（クリス？お前はプエルだろ？）

そう考えていたそのとき！

プエルの指が血のように赤くなっていった。

「このままにしててね。腕」

プエルがそういうと、俺の腕に赤くなった指で文字なのか記号なのかわからないものを書いた。

「！！！！」

俺の腕に激痛が走った！俺は激痛すぎて声も出なかった。

「ふう・・・これでおしまい」

プエルが俺の腕に書くのを止めたとたん腕の痛みが消え、焼けるような熱さになった。

「剣の訓練が終わったら魔導も教えてあげるわ」

気楽そうに言うが、そのときの俺は焼けるような腕の痛みが残っていて返事が出来なかった。

そんなことも知らないでプエルは笑って

「ほら、しつかり！！」

と言う。

（いてえよ・・・！！こんなのでホントに魔導とやらが使えんのか

！？)

俺が思っていた時に、1人の少年（子供）が近くにきた。

「あ、ガイル待ってたよ」

俺は腕の熱さが消えてその少年を見た。そして

「こいつがガイル？」

俺は軽く馬鹿にしたように言った。するとプエルが

「そうよ。この子がガイル。レンハウの剣の師匠よ」

「はあ！！？」

## 第6話：剣と魔導

俺はガイルからもらった剣（合剣）を十字にあわせ俺の国、日本の昔の剣。カタナを想像した。

すると、合剣が光り一本の剣、刀になった。

「いくぞ！ガキ」

俺はガイルに向かって突進する！

ガイルはそれを軽々とよけ剣の腹の部分で横薙ぎをしてきた。

俺はよけきれず派手に吹っ飛ぶ！

「まだまだじゃのう。お主！」

「今の声、ガイルお前か？」

俺は吹っ飛ばされた体を起こしガイルに聞く。

「わし以外に誰がある？正真正銘わしの声じゃよ」

「ジジくさ・・・」

俺がそういった瞬間！ガイルが突っ込んできた！

ガイルはまた横薙ぎをしてきたが、俺はなんとか横薙ぎを刀で防ぎはじき返す。

「ほう・・・わしの剣を止めるとは・・・」

ガイルは驚いた表情で言う。

「はっ！だてに剣道やってねえ！」

俺は調子に乗った。そのとき！ガイルの剣が光り、大剣になった！

「これは、防げるかのお？」

ガイルは大剣を引きずることなく、しかも片手で持って突っ込んでくる！

俺は反撃できる隙が無く、ただ避けるしかなかった。

「避けずに戦いなよ！これは剣の訓練なんだよ！」

プエルが大声で俺に怒鳴る！

（こんな剣受けされるかよ！刀が折れるぜ！？）

俺はそう思いつつガイルに突っ込む！

「くられ！」

俺はそう言っただけで刀の刃の逆部分で切りかかる。  
ガイルはすべての攻撃を避ける。

（こいつ、本当に10歳のガキか？）

俺がそう思っている時に、ガイルが

「死閃煉獄衝！」

と言っただけで大剣を振り上げ、下ろした瞬間！俺の体が切り刻まれた！

「な・・・！！？」

俺はそう言い倒れた。

「ダイジョブ？レンホウ」

プエルが心配そうに俺を気遣う。俺は2時間気絶していたらしい。

「あれをくらって生きてるとは、お主なかなかじゃの！」

（殺す気が！？・・・このガキ！泣かす！！）

そう思っている中、プエルが

「ブルー・レスト　！！」

と言ったら、俺の傷が少しずつ癒されていった。

「これが魔導か？」

俺は、痛みを耐えながら聞く。

「そ　これは　癒し　だから初級魔導だね」

「初級？じゃ、上級とかもあるのか？」

俺がそう聞くと、

「うん。あるよ。初級・中級・上級・特殊級があるよ」

「特殊級？なんだそれ？」

「特殊級は言霊じゃなくて呪文なんだ。ちょっと長い・・・」

「へえ・・・じゃあ　言霊　ってなに？」

俺がプエルに質問していると、ガイルが

「お主は本当にレヴェル人ではないのだな」

と珍しそうに言う。

「む！いいだろ？俺だって来たくて来たわけじゃねえ」

するとプエルが

「まあまあ、話を続けるよ。言霊は魔導士の呪文かな？」

「わかんねえ……」

俺がそう言う

「バカな男じゃ」

いちいちガイルが絡んでくる。少しムカツク……

「ガイルはかまって欲しいんだよ。許してやってとりあえず、次は魔導の練習だね」

「おう！」

「と言つてもまずは、レンホウの言霊を決めないと……。何がいい？」

「何がいいって言われてもなにを基準に考えるんだよ！」  
俺がプエルに怒る。

「そっか。ゴメンゴメン えっと、例えば色なんかだとわかりやすいね。あたしの言霊は ブルー・レスト。これは青って意味の言葉が入ってるでしょ？」

「うん」

「つまり、青は水とかを表すからあたしは水系の魔導が得意なわけわかった？つまり色を入れればその色を連想する属性が強くなるんだ」

「なるほど、つまり 色 と 属性 か」

プエルの長い説明が終わった。そして俺は言霊を考えていた。

「ん……俺のいた世界の古代文字で 無 って意味の言葉で トリス は？」

「無のトリスか。うん いいね」

プエルはやけに上機嫌で言う。

「じゃ、言霊を決めるからあたしの後に続いて言つて」

プエルがそう言うのと彼女の周りの空気が変わった。

「我が言霊を決める。その名は トリス 無を意味する言葉」

俺は続く。

「我が言霊を決める。その名は トリス 無を意味する言葉」  
すると、右手の甲に文字が浮かんた。

「これはこの世界の古代文字 スローク 文字らしいよ」

「へえ・・・」

俺は納得したように返事をする。

「魔導を覚えたのならその剣は主にやろう」  
ガイルがしゃべる。

(どういうことだ？魔導を習得したからって)

俺は不思議で仕方なかった。

「そうか。 消失 と 召喚 ね さすがガイル」

プエルが気づいたようにガイルを指差して言う。

「最初に 消失 と 召喚 を覚えましょ」

「どうやって覚えるんだよ？」

俺はプエルに聞く。

「簡単 カンタン あたしに続いて」

(またか・・・)

「能力変換！ 消失 トリス」

「能力変換！ 消失 トリス」

と俺は続く。すると、俺が持っていた刀が消えた。

「じゃ、もう一回！今度は 召喚 だよ」

「はいよ」

俺はやる気なさそうに返事をする。

「能力変換！ 召喚 トリス」

「能力変換！ 召喚 トリス」

そうすると、目の前に消えた刀が合剣の状態で現れた。

「ひとまず、これだけでいいかな？後々別な魔導は教えていくよ」

プエルがそう言ったらガイルが

「そうじゃな。早く任務行こうぞ！」

そう言ってガイルだけ先に町に戻った。

「じゃ、あたし達も行こう レンホウ」

そうプエルが言つと俺の手を引っ張つて町に戻る。



## 第7話：初仕事

俺とプエルは町に着いたら、すぐにクロームハウスに向かった。

「遅いぞ！二人！！もっと早く来れんのか！」

クロームハウスに着いてすぐガイルから怒りの言葉をもらう。

「仕方ないでしょ？どっかの小さい少年が大剣でレンハウの体を切り刻んじやったんだから。ねえ？」

プエルが意地悪そうにガイルに言う。

するとガイルは

「仕方あるまい。つい本気になってしまったのじゃから」

軽く開き直ったようにも聞こえたが俺は気にせず

「そんなことより、仕事やらないのか？お二人さん」

「あ、忘れてた。こんな子供に向きになるなんて」

「わしは子供ではない！」

（いいから、早く受付に行け！）

俺はそう言いたかったが、最低クラスの俺が言っても意味が無いと  
思い言わなかった。

喧嘩が終わりプエルが諦めたように受付に行く。

「なんか仕事ありますかあ〜？」

（ほれみる。そっちが子供ではないか・・・）

ガイルが囁く。

「番号と名前。後、受けるクラスを言うてください」

「クローム番号1538。プエルです。それと、仕事のランクはCで」

子供のような喋り方だが、あえて言わなかった。プエルはキレると怖い！それはこの間わかったことだ。

「承りました。それでは仕事を探すので少々お待ちください」

受付の男はプエルを見て言う。

「そーいや、仕事を受ける時は受ける人数とかは言わないのか？」

「そういうことはクライアント。つまり依頼主に直接会ってから言うんじゃない」

珍しくガイルが説明してくれた。

「仕事が見つかりました。金塊の採掘・希少動物捕獲・

コレグ山の伐採禁止運動 がありますが、どれにするのですか？」

「採掘に捕獲に禁止運動……。ずいぶんバラけたわね」

「うむ。どれをやるうにもFクラスがいるとすべてが大変じゃ」

ガイルがまた皮肉を言ってくる。

俺は（我慢しろ俺……。たががガキの言ってることだ……。！！！）

と、自己暗示をかける。

「カンタンな所で捕獲にする？」

「そうじゃの。捕獲ならこやつも手伝えるじゃろ？」

「お決まりになられましたか？」

「はい。希少動物捕獲の依頼をやらせていただきます」

プエルが力強く言う。

「承りました。では、町の東端にある。屋敷に行ってください。クライアントの家はそこですので」

「わかりました。じゃ、行こレンホウ。ガイル」

プエルがそう言うのと、俺とガイルは

「「ああ。わかった。すぐ行く」」

と言い、クロームハウスを出てクライアントの家に向かった。

「おわー。でつけえなあ！」

俺はクロームハウスより大きい屋敷を見て驚いていた。

「そりゃ、ここはレーヴェルシティー大きい屋敷だもん」

プエルが自慢気そうに言うが

「ここはそなたの家ではないじゃろプエル」

とガイルがつっこむ。

「しかし変じゃ。何ゆえ希少動物捕獲のクライアントがこの屋敷の

主人なのじゃ？」

「いや、まだ主人って決まったわけじゃないでしょ……」  
今度はプエルがつっこむ。

大きな門が開きガードマンが二人こっちに來た。

「この屋敷に何の用だ？用が無いなら立ち去れ！」

ガードマンは傲慢な態度で聞いてくる。

「あたしたちは クローマー です。 クライアントに会いたいの  
ですが？」

「そうじゃ。早く通せ！図体だけがでかい馬鹿者どもめ！」

と、プエルとガイルが強気で言う。

するとガードマンは

「し、失礼しました。まさかクローマーの方々だったとは！すぐお  
通します！！」

（なんでクローマー？……あ、クロームをする人だからクローマ

ーか。納得）

おれは1人で納得していると、

「早く來なよ。レンホウ」

プエル達はガードマンに連れられて奥に進んでいた。

「はいよ。すぐ行く」

屋敷の中の一室で待っていると、1人の女の人が出てきた。

「わたくしがクライアントさま。オッホッホッホッホ！！」

（うわ……。さますって使う人いんのかよ？キモイな）

俺は口には出さず頭で思っていた。

「早速仕事の話に移りたいのですが」

プエルがそう言う

「そうございますね。あなたに捕獲してもらいたい希少動物は アポス  
さます」

「アポス？それはいったいどういう動物なのですか？え」と……  
俺は名前を言いたかったが聞いていないからわからなかった。

「申し送れた致します。わたくし、チフレと言っ致します」

「ではチフレ婦人。アポスとは？」

俺は質問をした。

「アポスとは、とても臆病な動物致します。外見的特長は体色が黒、手足が赤、顔は白と、とても変わった色をした動物致します。主な生息地域は草原や湿地帯に多く生息していただきます。もう今となつてはハスク草原にある隠れ家にいるだけになってしまった致しますけど」  
「なるほど。それで我らに依頼を頼んだということじゃなご婦人」  
ガイルが納得したような口ぶりと言う。

「そう致します。ですから、わたくしはその動物を集め繁殖させまた増やそうと考えている致します!!」

（なるほど・・・。正当な理由があるわけか）

俺が考えている時に

「わかりました。この仕事。請負ましょう。私とレンホウ。そしてガイルが」

プエルが立ち上がって言う。

「おお・・・!!ありがとうございます。では、頼みます!!」

「「お任せを」」

三人でそう言うのと屋敷を出て草原へ向かう。

だいぶ歩いて、俺たちは、ハスク草原に来ていた。

「さて、見つけるまでが一苦労じゃな」

「そんな時のために練習していた魔導があるよ」

（そっか、魔導を使えば案外楽に・・・）

俺がそう思っている時に

「・・・ブルー・レスト　!!!」

プエルが言霊を発した瞬間！俺とガイル。そしてプエル。さらには上空を飛んでる鳥までもが光りだした。

「なんの力じゃ？」

「光　よ。力を生き物だけに留めたの。だから、アポスもすぐに見つかる・・・。ああゝ!!!」

力の説明中なのにプエルが叫んだ。

「見て！！あれがアポスじゃないかしら？黒と赤と白！間違いないわ」

「そのようじゃな。レンホウ！捕まえにいくぞ！！プエルは 身体強化 を！」

そうガイルが言つて、俺とガイルは目標向かって走り出した。

「オツケー 任せて！」

能力変換 脚力強化 ブルー・レスト！！」

プエルが後ろで言霊を発すると体が軽くなり普通の2倍速く走れるようになった。

「さすがプエルじゃ。いくぞレンホウ後ろから回り込め！」

ガイルの言葉に従って俺は後ろに回りこみ、アポスを捕らえることに成功した。

「こいつがアポスカ。犬と狐が合わさったみたいだな」

俺はアポスを見ながらいった。そして、捕まえてから数秒後。体が重くなった！

「まあ、もう必要ないでしょ？身体強化」

プエルが術を解いていた。

「まあ、Cにしては簡単じゃったな」

ガイルがそう言つと、空が突然暗くなった！

「なんだ？」

俺は空を見上げて呆然とした。推定75mの竜が降りてきたのだ！

！！

## 第7話：初仕事（後書き）

この小説を読んでのご感想お待ちしております

## 第8話：覚醒

ガイルは剣を片手に、俺は両手に携え竜に突進する！  
竜は薙ぎ払うように尻尾で俺とガイルを吹っ飛ばした！！

「おい！プエルはなんで補助してくれねえんだ！？」

「プエルはアポスに 捕縛 を使ってるから補助が出来ないんじゃない！！ここはわしらだけで食い止めるのじゃ！！」

「ごめん！！なんとか二人だけでそいつを倒して！！」

プエルがアポスに魔導をかけながら言う。

「・・・わかったよ！！つつても、相手は竜だぞ？」

俺は吹っ飛ばされた体を起こしてガイルに言う。

「竜とて所詮は生き物。ダメージを与えつつければ倒れる！」

そう言い、ガイルは剣を大剣に変化させ竜の体を切る！

ガキン！

ガイルの剣が竜の鱗にはじき返された。

「おい！全然効いてねえぞ？」

「やかましい！！おぬしも手伝え！！」

ガイルが俺にキレル。

竜は空気を吸い込み口から巨大な火球を吐き出す。俺はそれを何とか避け竜の懷に潜り込んだ！

「能力変換 水」

俺は魔導を水に変え、合剣を十字にあわせ双剣に変化させた。そして、双剣に水を纏わせ切りかかる。

「大剣が効かねえんなら集中した場所に傷をつける！！」

俺は竜の腹を何度も切り、深手を負わせようとした。  
しかし、竜は後ろへ下がり俺に火球を放ってきた！

俺はよけられずに直撃した。

「レンホウ！！！！」

プエルとガイルの声が聞こえる。

（うわ、熱すぎだろ……。俺死んだかな？）  
俺の意識はなくなった……

「ブルー・レスト！！！！お願いだから目を覚まして！！」

プエルが泣きながら俺に魔導をかける。

「死ぬって誰がだよ……。？」

俺はゆっくり体を起こした。

「レンホウ！よかった死んだかと思っちゃった……。？」

（勝手に殺さないでくれ……）

「まさかおぬしの中にアレがいたとは……。？」

ガイルは驚きながら俺を見て言う。

「アレ？」

俺は二人を交互に見て言う。

「精霊 よ。それも 人 を司る」

「精霊？この世界には精霊がいるのか？」

「いる……。というか憑くじやな。この国の人間は生まれた時に精

霊が憑くのじや。わしは 地 」

「あたしは 水 よ」

「へえ……。！！！！」

俺は返事をしながらプエル達の奥を見た。

竜が切り刻まれて死んでいた！！！！

「その竜……。？」

俺は竜を指差しながら言った。

「おぬしの中にいる精霊が出てきてこやつを殺したのじや。なんと

もむごい方法での」

「あなたの中にいる奴が消えるときに

「しばらくはこの中にいてやる。宿主に伝えてくれ」

って言ってたよ」

「宿主ってのは俺か……。むごい方法ってのは？」



俺はガイルから俺の中にいる奴の事を聞いた。

俺が火球をくらった瞬間、俺の髪がオレンジ色になったらしい。言い忘れていたが、俺の髪の色は黒。少し赤の入った黒だ。

そして

「やっとでられたぜ！外は広くていいねえ！！たく、早く俺の存在に気づけよ？クソ宿主！！」

そいつはそう言って竜のほうを見た。

「ほう、竜か……。丁度いい俺の運動に付き合ってくれよ」

男は双剣を持って大胆に竜との間合いを詰めていく。

グルルル！！！！ガアー！！！！！！

竜が咆哮をあげると、男は

「そう焦るなよ。焦ると死ぬのが早くなる……。ぜ！！！！」

男は一瞬で竜を通り抜けた。……。次の瞬間

竜の体から血が噴出した！！

「ヒヤハハハ！！まだまだだぜ？俺を楽しませてくれよ？」

男はそう言うとは回も竜を往復し切り刻んでいった。双剣は血の色が移り赤くなっていた。

「もうそろそろ死にてえだろ？遠慮すんな。しっかり殺してやるよ

！！！！」

男はそう言う

「我に託されしは大いなる闇の慈悲。漆黒の処刑人よその大鎌で罪人の首を切り落とせ……。」

（これは、特殊魔導！！）

プエルはガイルに

（危険だわ！！早く後ろへ下がって）と伝えたい。

ガイルはすぐに後ろ下がった。そして男は

「さあ、お前は生か死かどっちがいい？まあ、お前に選択権は無い。ヒヤハハハ！！！！死ね」

そう言い、竜は闇に飲まれた。

数分がたつて闇が晴れそこから竜が出てきたが、切り刻まれた後だった……

そして男はプエルに伝言を言い意識を消したらしい。そして髪の色も戻ったらしい。

「そんな奴が俺の中に？」

俺は生まれて初めて自分を怖いと思った。

「まあ、助かったからいいでしょ？さ、後はこのアポスを届けて依頼終了ね」

「そうじゃの、それから、竜の鱗と角を持っていくのかの」

「なんでだ？」

俺はガイルに聞く。

「竜は依頼に関係なく討伐すればお金がもらえるんじゃない」

「なるほどね」

「じゃ、婦人宅に行こう」

二人が先に町に戻ったが、俺は竜を見て不安と恐怖にかられた。そして、俺たちは町に戻った……

## 第9話：夢

俺たちはチフレ婦人の屋敷に行き、アポスを届けその際に竜と戦ったことを話した。

「なぜ、アポスを捕らえたら竜が現れたのかご存知ですか？チフレ婦人」

俺は極力丁寧な言葉で話した。すると

「さあ……。アポスは臆病な動物ですから、竜に助けを呼んだのかもしれないですね」

まったく理由になっていない返事が返ってきた。

（このババア……。！！！！ちゃんとした答えを言え）

俺は本音を飲み込み口には出さなかった。

「ですが、アポスを捕らえて本当にありがとうございます！わたくしのささやかな夢は叶ったえます」

「ささやかな夢？それは一体どういうことですか？」

プエルが怒りの声を殺し冷静な声で問う。

「そ・それは、ほら、わたくしの夢は希少動物を保護することです  
ので……」

チフレ婦人は苦し紛れの言い訳をする。

「そうですか。わかりました。では依頼は完了しましたので、私たちは帰ります」

「そうぞますね。お金はクロームハウスで貰ってほしいえます」  
チフレは満足そうに言う。

そして俺たちは婦人の屋敷を出て、クロームハウスへ向かった。

俺たちはクロームハウスへ行き受付の男の所に行った。

「依頼を終えたようですね。ご苦労様です。では、これが依頼完了金です」

そう言う男はプエルにお金を渡した。

「へえ……。Cクラスで10000ギルドかあ。多いね」  
「ぎるど？」

「この世界の通貨じゃな」  
ガイルが説明してくれた。

（このごろよくガイルが説明してくれるな……）

俺はそう思いながら二人と一緒にクロームハウスを出た。

「とりあえず、家に帰ろう。レンハウも家族みたいなもんだからね」  
「

（家族か……）

俺には家族はいなかった。と言うよりいたが全員病気や事故などで死んでしまっていたから。

「どうしたのじゃ？」

ガイルが心配そうに俺を見て言う。

「いや、俺家族いなかったからさ」

「え！？じゃ、両親はいなかったの？」

「いや、いた。全員死んだけど」

俺は不思議と悲しくなかった。

そう言つてると、家に着いていた。

この家は、純和風の雰囲気を出していた。

「広いな……」

「まあね」

プエルが自慢気に言う。

俺たちは中に入って談話室？茶の間？みたいな所に来た。

「とりあえずレンホウは寝たら？別な世界から来て疲れたでしょ？」

「どんなだよ？」

「気にせずに寝ることじゃ。疲れを癒せ」

俺はガイルとプエルの言葉に甘え寝ることにした。

「じゃ、明日ね」

「と言つても明日は請負はしないつもりじゃ。ゆっくり寝るが良い」

「ああ。じゃ、おやすみ」

俺は布団を用意して寝た。

「ここ、どこだ？ああ。夢の中か」

夢と言っても質素すぎるほどだ。

光が少ししかない空間。だが、しっかりと道はわかる。

「なんかいる？」

俺は道の奥に人影を見つけた。

よく見るとそれは俺の姿だった！！

「よう、宿主さん 元気だったか？」

「お前が俺の中にいる精霊か？」

俺は表情を変えずに聞き返す。

「その通り やつと通じたなあ。早く気づいてくれよ！」

精霊は傲慢な態度で言ってくる。

「ここに来たついでだ。お前に俺を呼び出す呪文を教えてやるよ」

「そんなの聞きたくないね」

俺は耳をふさぐ。

しかし

耳をふさいでもその声は聞こえてきた。

「我に託されしは大いなる殺戮の使者。我の体を汝に捧げる。汝の

力存分に發揮せよ。だ」

「なんで耳をふさいでも聞こえんだよ！」

「あほか？てめえ。ここは俺とお前の精神が繋がった世界だぜ？聞

こえないなんてあるわけないぜ？」

精霊は傲慢な態度を崩さず俺に話し掛けてくる。

「そついやおまえの名前はなんだよ？精霊」

「お前の言霊だぜ？俺は トリス だ

じゃあな。宿主」

そう言つと、精霊 トリス は消えた。そして俺もその世界から消えた。

俺が起きたのは次の日の朝だった。

「くそ……。胸くそ悪い!!」

俺は軽く不機嫌になりながら朝を迎えた。

## 第10話：クラス昇格（前編）

俺がここ レーヴェル国 に来てから、1ヶ月がたった。

「今日はどんな依頼が良い？レンホウ」

「どんなって、俺さクローマーになって1ヶ月なのにいまだにFクラスなんだけど・・・」

そう。俺は自分の仕事ではなく毎回プエルやガイルの依頼の付き添いだけをやっていて、まだ1回もFクラスの依頼を受けたことが無い。

「ならば、クラス昇格をするか？今のお主ならばCぐらいにいけるが」

ガイルが言う。

「そうだね。今のレンホウならCクラスぐらいにはなれるよ」

「昇格ってどうやってなんだ？」

俺は二人に聞く。するとプエルは

「クロームハウスに行って受付の人にクラス昇格したいって言えばオッケーだよ」

と簡単に説明してくれた。

「しかし、どんな内容かわからぬから アーバス に聞いておくのが良いじゃろ」

「アーバス？」

俺はガイルに聞いた。

「うむ。情報屋じゃ。ほぼ確実な情報を買ってくれるぞ。わしらも信用している」

「へえ・・・。じゃ、行ってみようぜ」

俺は二人に道案内を頼んで家を出た。

家を出て10分ほど歩いた所にポツンと一軒家があった。

「ここが情報屋 アーバスの館 だよ」

プエルが家を指差しながら言うが、とても館には見えただの小ぢんまりした家だ。

「じゃ、早速行こうぜ？」

俺は家に入ろうとしたが二人はその場に立ち、動かない。

「どうした？行かないのか？」

「館には独りではいるのがルールなの。」

「うむ。我らはここで待つてるぞ」

そう言うて二人は手を振った。

（そんなルールあんのか・・・）

俺はそう思いながら館？に入った。

中は（中も）案外普通の家のつくりで物珍しいものもなかった。

俺が独りで待つていると奥から1人の老婆が歩いてきた。

「この私に何のようかね？異世界のお方。今はあの二人と暮らしているんじゃない？」

「っ・・・！！なんでわかるんだ？」

「私は情報屋ですよ？それくらいの事など・・・」

さて何が知りたいのじゃ？」

不思議な気配がある老婆　アーバス　に俺は知りたいことを話した。

「ほおほお。E・D・Cの昇格テストの内容が知りたいとな・・・」

いいでしょう。教えましょう。まずEに上がるテストの内容はすなわち、戦闘能力の高さです。つまりは、戦闘ですね」

（まんまじゃねえか・・・）

俺は本音を言いたかったが言わなかった。

「次にDに上がるために必要なのは瞬発力です。これも戦闘ですね・・・」

俺は軽く腹が立ってきた・・・

「最後にCに上がるために必要なのは魔導の強さ、精神力の高さです。実質この昇格が一番厄介と言う声が多数ありますね。

ま、このくらいでしょうか？」



俺は参考になったのか、ならないのかよくわからなかった。

しかし、情報をくれたことには感謝したように見せるため軽く会釈をして店を出た。ここは初回のみ無料らしい。(クローマー限定)

外に出るとプエルが

「どうだった？ 有力な情報は教えてもらった？」  
と聞いてくる。

「ああ……。まあな……。」

俺は適当に返事をする。

「ではクロームハウスに行き昇格テストを受けに行け」

ガイルが小さな手で俺の背中を押した。

「そうだな。一応情報は貰ったんだし」

俺たちはクロームハウスへ向かった。

俺たちはハウスへ着き中に入って、受付の男に

「昇格テストを受けたいんですが……」  
と言った。

「クローム番号。名前。クラスを言ってください」

男は相変わらず感情が無い。

プエルから聞いた話では魔導で動いているらしい。

「クローム番号……。あれ？ 俺何番だったっけ？」

俺は自分のクローム番号を忘れていた。

ガイルは頭に手をやり、プエルは

「バカ？」

と言わんばかりの顔をしていた。

「あなたがお持ちになっているクローム用の携帯電話をお見せください」

受付の男は俺に携帯を出すように言ってきた。

「あ、そうか携帯に書いてあったっけ。」

えーと……。8403番です。名前はレンホウ。クラスはFです。」

「承りました。では準備をするので少々お待ちください。」

準備が完了したら呼びますので、あちらの扉に入ってください」

男はそう言つと扉の奥に行った。

俺はガイルとプエルに怒られながら待っていた・・・

「まったくクローム番号忘れるクローマーなんか聞いたこと無いよ？」

「そうじゃー！お主はバカだと思っていたが、まさかこれほどとは・・・」

（そんなに怒られるようなことしたか？俺）

俺は説教に耐えながら準備完了の知らせを待っている。そのとき

「レン・ホウ様。準備が完了しましたので、その扉から中に入りください」

（やっと、呼び出したよ。ようやく開放される・・・）

俺は急ぎ足で扉に向かった。すると後ろから

「早く終わらせてきなさいねー！！あなたなら楽勝のはずよー」

プエルの声援が聞こえてきた。そして、ついでに聞こえてきたものはガイルの声で

「帰ってきたらまたみっちり説教をするから覚悟することじゃな」

俺は、（うわ・・・ゆっくり帰ってこよう）

俺は心の底からそう思い、扉を開け奥に入ってしまった。

## 第11話：クラス昇格（中編）

扉の奥に行くと、短い通路があった。

俺は歩きながら周りを警戒して進む。すると、受付の男が通路の脇に立っていた。

「先に所有武器を出しておくことです。この奥では魔導は使えませんで」

俺は男の指示に従った。

「能力変換 召喚 トリス・・・」

すると男は

「では、これを片腕にはめてください」

と言い、俺に腕輪を差し出した。

「腕輪？・・・わかった」

「腕輪をはめましたら奥に行き、指示に従ってください

では、健闘をお祈りしています」

男はその後は何も言わずにそこに立っていた。

通路の奥は何も無い正方形の部屋があった。するとどこから

「さあ、テストを始めます。このテストは戦闘能力を見るテストです。

あいてはあなたを殺す気で襲ってくるでしょう。

それを交わしつつ相手に決定打、または死に至らしめるほどのダメージを与えて下さい。

では始めます・・・」

放送が終わり奥の壁が開いた。出てきたのは、人間とは思えないほど巨大（推定5m）の男が槍を持ってやってきた。

「グウウ！！ゴロシデやる」

（こいつは人間じゃないのか？なら話は早い殺す！！！！）

俺は剣を十字に構え、曲刀に変化させた。

化け物は俺と直線状に並びそのまま槍を持って走ってきた。

俺はそれを軽く避け横腹に水平に切りかった。

だが、化け物の体に当たる前に剣が止まった。

（切れない？いや、俺は本気で切りかった！なのになぜ剣が途中で止まる！？）

俺が考えてる時に化け物は遠慮なしに俺を蹴り飛ばした。

「ゲホッ！！痛ってえ・・・」

俺は壁に叩きつけられ口から鮮血を吐き出す。化け物は攻撃を繋げるように槍で俺をついてくる。

俺は体を捻って槍を避け、着地する。が、完全には避けきれず横腹から血が流れる。

（血なんて流したの2年ぶりくらいだな）

俺はそう考えながら、化け物の懷に飛び込み腹に切りかかる。だがまたしても剣は途中で止まる。

「何で切れねえんだよ！？」

俺が叫んでいると小さな声で

（助けてくれ・・・俺を殺してくれ・・・）

もういやだこんな体は！！誰か、俺を殺してくれ！！）  
そう聞こえた。

（まさか、こいつ人間！？嘘だろ！？）

いや、だけど人間なら殺せない理由がわかる）

俺が考えている時に化け物は

「ジねエ！！！！おまえオ殺ズ！！」

（さっきの声と一緒だ！間違いないな）

俺がこいつを切れないのは本能的なものだ）  
似たような例がある。

作られた物（生き物）は作り主を殺すことが出来ない。体は本気で殺そうとしていても本能的に察知し行動にブレーキをかけてしまうらしい。

（だが俺は作られてもいないし普通の人間だ）

（まだわかんねえのか？宿主さんよ？お前は人間を切ることに迷いがあんだよ！！迷ってたらこいつに殺されちまうぜ？）

「トリス……。久しぶりだな。あの夢以来か？」

周りには独り言のように思うだろうが、俺は精霊 トリス が憑いている。

プエルに聞いた話だと精霊は話すことは出来ないらしい。だが俺の精霊は話す。しかも傲慢な態度で！！

俺は化け物の攻撃を避けながらトリスと会話をする。

（なあ……。俺に代われよ？こんなザコ5秒でミンチにしてやるぜ？）

「こいつは人間だぞ！？そんなこと……」

（元 人間だろお？とつと殺して人間に生まれ変わらせたほうがいいと思うぜえ？）

「そういう問題……。！！ゴホッ！！」

会話に集中していたために化け物の攻撃に気が回らなかった。俺は槍の横薙ぎをくらいまた壁に叩きつけられた。

（おいおい……。死んじまうぜえ？ほら、俺に代われよ！！）

「お前に代わったら俺が後悔するからな……」

（チッ！！ああそうかよ！！じゃあ勝手に死ね！！！！）

そう言っただけトリスは意識を俺の奥底に消した。

（けど、どうする？俺はあいつを切れないし、魔導も使えない）

俺が対抗策を考えている途中にまた

（誰か……。助けてくれ……）

俺を殺してくれ！！）

（くそっ！！殺すわけにもいかなえし……。ん？たしか1・2週間前に）

「なあ、剣も魔導も通用しない敵がいたらどうするんだ？」

俺はガイルとプエルに聞いた。

「そういう時はほれ、プエルが 身体強化 をかけて二人でタコ殴りじゃ!!!!」

「そ あたしの力を強くしたら、配分を考えてガイルに送るのよ。それで相手をボコボコね」

「なんとも、原始的な方法だな・・・」

（そうか!!素手だ!・・・って気づくの遅すぎだろ!!俺）

俺は曲刀を戻し、合剣を壁に刺して化け物を向いた。

「これなら、ダイジョブだ!!」

俺は拳を握り真っ向から化け物の槍に対峙した。

「何ヲヤツデイル!!」

化け物は槍を構え突進してくるが、俺は体制を低くし槍を避け地面と水平に足払いをして化け物を転倒させた。

そしてすかさず背中に乗り、全体重をかけて首に攻撃を当て気絶させた。

化け物を気絶させたらどこにあるのかわからないスピーカーから声が聞こえた。

「おめでとうございます。あなたはこれではれてEクラスです。もっと精進して上を目指してください」

声が消えると、化け物が出てきた反対側の壁が開き、結構渋い男がオッサン出てきた。

「おめでとう!!ようやくEクラスになれたね」

「あんた、誰？」

俺は声に出すつもりは無かったのだが、出てしまった。

「おお、すまない。私はクロームハウスの全権を仕切るギルドステム・ファルクだ。以後お見知りおきを」

「はぁ・・・。蓮崩です」

「うんうん。聞いているよレン・ホウ君だね？」

「いえ、蓮崩です。蓮と崩の間に点は、ありません」

「そうかそうか、悪かったねレン・ホウ君」

（このオヤジ!!!）

そして、俺はいろいろと会話をしてクロームハウスの受付場に戻った。

「うわ!!! 血だらけ・・・大丈夫？」

プエルが心配そうに俺に駆け寄ってきた。

「大丈夫かな？一応は」

「そんなことはどうでもよい。プエル！癒しを」

「そうだね！変換 癒し ブルー・レスト」

プエルは言霊を発し俺の傷を癒し、血を増やした。

「癒し は血も増やせるのか？」

「うん といつても元々の血の量よりは増やせないけど・・・」

プエルは申し訳なさそうに俺を見て言う。

「いや助かる。実際貧血でフラフラだったからさ・・・」

俺たちが他愛も無い話をしていると

「レン・ホウ様続いてDクラスに上がるためのテストを受けますか？受けるのならばすぐにご用意しますが？」

「どうするかな？」

（たしか次は瞬発力だよな・・・。大丈夫か？）

「受けます」

俺は軽い気持ちで返事をした。

「ダイジョブなの？」

「まあ、大丈夫だろ？」

俺がプエルと話していると

「承りました。では少々お待ちください。準備が出来ましたら・・・」

「

もうよい。そのセリフは聞き飽きた!!!」

なぜかガイルがキレた。

（聞き飽きたって・・・。まだ二回しか言っていないだろ）

「・・・わかりました。では準備をしますので少々お待ちください」  
そう言って男はまた扉の奥へ行った。

そして、俺は仮眠を取りながら待つことにした。

（プエルに起こされる前に起きよう）

そう思いながら・・・



## 第12話：クラス昇格（後編）（前書き）

キャラクター紹介が後書きにあります。

## 第12話：クラス昇格（後編）

「レン・ホウ様準備が完了しましたので奥の扉にお入りください」  
俺はこの放送で目が覚めた。

「んんんんん。よく寝た？かな」

俺は軽く準備体操をして扉を開け奥に行った。

奥に行く通路の脇にまた男が立っていた。

「今回は武器は必要ないでしょう。」

では、これを片腕に」

そう言う男はまた俺に腕輪を差し出してきた。

「これって、俺さっきも付けただろ・・・俺はさっきのテスト前に付けた腕輪を男に見せようとしたが腕輪はどこにも無かった。

「この腕輪はこのテスト中に限り存在できる腕輪なのです。

さあ、腕輪を」

（魔導か？）

俺は考えながら男から腕輪を貰い片腕にはめた。

そして、奥に行くとまた同じような正方形の部屋があった。

（変わってねえ・・・）

俺はいろいろと考えていた。そのとき

「Dクラスに上がるテストの内容は瞬発力です。

これからあなたには、あるものを捕獲していただきます」

「それは、この部屋の中でって意味か？」

「ええ。そうです。そのものはあなたを殺すことはありませんが、行動不能にするほどは攻撃してくるでしょう。あなたはそれを交わしつつあいてを捕まえ、気絶させてください。

では、始めます・・・」

放送が終わると奥から、子供がでてきた。

「ガキ？こいつを捕まえりゃいいんだよね？」

楽勝だぞ？」

俺はそう言い子供に近づくが、子供は風のような速さで俺を通り抜けた。

そして俺の体を切っていた。

「痛ってえ……。！っ！つか、速つ……」

俺はあまりの不意打ちに対処できなかった。

「なるほど……。痛つ……。！」

俺は切られた左肩をおさえながら子供との間合いを空ける。すると、子供は構えをときただそこにたたずんでいる。

「ん？近づかないとダメなのか？」

俺は近づこうとしたが不思議な感覚が頭をよぎった。

（ん？なんかトリスが出てきたような……。気のせいかな）

俺は振り払うように顔を振り子供に近づく。

しかし、また子供は風のような速さで俺を通り抜け今度は右肩を切っていく。

（こいつは近づけば通り抜けて切り、離れば隙を見せるか……。どうするもんかね？）

俺は子供との間合いを空けゆっくり考える。

「よし。これでいくか！」

俺は考えを頭の中でまとめ子供に近づいていく。

子供は通り抜けようとするがなぜか子供は動かない。

（やつぱりな。捕まえようとしなければ通り抜けてこない。

しかも攻撃もしてこないとはね……）

俺はゆっくり子供に近づき子供の目の前に座った。

「よ！なんでおまえみたいながキがテストの係なんかやってんだ？」

俺は子供にゆっくり聞く。だが子供は口を開こうとはしない。

（今ならダイジョブだろ？）

俺は子供の隙について片腕をつかみ首を攻撃して気絶させた。

「よし。これで終わりだな」

俺はゆつくりと立ち上がり放送が鳴らないのを確認した後、壁が開きましても出てきたのがギルドシステムだった。

「おめでとう。まさかこんなに早く二段階も上がるとはね」。

恐れ入ったよ」

ギルドシステム（ギルド）はあたかも自分が合格したように嬉しそうに俺に話し掛けてくる。

「どうも・・・」。

俺、用があるんで帰っていいですか？」

「そうか、じゃあこれをあげよう」

ギルドはそういつと俺に首飾りを渡してきた。

「これは？」

「これはチョーカーといってね身分を表すものさ。Dに上がればもらえる装飾品だよ。

上のクラスの任務は危険なものばかりだからね。身分証明が必要になってくるんだ」

「どうも・・・。じゃ、俺帰ります」

俺は必要ないと思ったが一応貰っておくことにした。そして、俺は受付場に戻った。

「お帰り〜 どうだった？」

「まあ、さっきよりは簡単だったな」

プエルが聞いてきたが俺は

「余裕！！」

という表情で答えを返した。

「両肩から血が出ておるぞ？それでも簡単だったのか？」

ガイルはなぜかいやみ口調で俺に突っかかってくる。

「この傷は浅いからな。そんなに苦労はしなかったって事だ」

俺がそういつとガイルは納得した表情で頷いた。

「レン・ハウ様Cクラスには上がりますか？」

受付の男はやけに簡単に聞いてきた。

「今日はいいです。疲れもあるので」

「そうですか。わかりました」

俺は頭では大丈夫だと思っていたが、体が言うことを聞かなかった。

「とりあえず、家に行く?」

プエルが俺に言ってくる。

「そうだな。休みたいしな」

俺は気の抜けた声で返事をする。

「わかった。じゃ、行こう 面倒だからとぶよ?」

「おう。・・・ん? とぶ? それどういう・・・」

「能力変換 移動 ブルー・レスト!」

プエルが言霊を発したらいつのまにか家の前にいた。

「久しぶりじゃな。この移動方法は」

「そうだね。5・6ヶ月ぐらいしてなかったもんね」

二人は普通どおりに話しているが俺は不思議で仕方なかった。

「今のつて魔導だろ? 移動 ってどこにでも行けるのか?」

俺はなんとか冷静さを保ちながらプエルに聞く。

「ん。正確には違うかな。ほら地面を見て。なんか書いてあるでしょう?」

「ああ」

地面には外郭の円が描かれておりその中には文字や記号が書かれていた。

「これは移動結界って言って、この結界があるとこだけに移動できるの」

(よくわかんねえけど・・・まあいいや)

「入り口の前で話すのもなんじゃ。早く入ろうぞ!!」

ガイルが泣きそうな声で叫んだ。

「そっか。ごめんごめん。じゃ中に入る」

俺たちは家に入りテストの内容などを話していた。

## 第12話：クラス昇格（後編）（後書き）

名前：蓮崩（家族がいないため名字はありません）

容姿：髪は赤の入った黒 瞳は黒 14歳 身長165cm 体重52kg

性格：本人曰く「おとなしい」周りから見れば「短気」

戦闘スタイル：合剣（魔導や体術もできる）

名前：里崎 聖

容姿：茶の入った黒（長髪） 瞳は黒 14歳 身長152cm  
体重は秘密

性格：普段は優しく真面目だが、怒ると【危険】

戦闘スタイル：なし（足技（右足のみ）は凄いらしい蓮崩体験済み）

名前：プエル

容姿：髪は短く青色 瞳は血のような赤 14歳 身長159cm  
体重 本人曰く41kg

性格：聖とほぼ同じ 明るい

戦闘スタイル：魔導（別な力もあるらしい・・・）

名前：ガイル・ジェラルド（やっとファミリーネームが出た）

容姿：緑の髪（短かすぎず長すぎず） 瞳も緑 10歳 身長146cm 体重42kg

性格：真面目 ジジくさい・・・

戦闘スタイル：合剣（体術も凄い？）

以上です。わからないことがあったらメッセージに書き込み（出来るのかな？）しておいてください。後書きに書くと思うんで。

### 第13話：危険！！

「なあ？プエルは？」

俺は茶の間でくつろいでいるガイルに聞いた。

「いないのか？じゃあ、今日は1日いないじゃろ」

「なんでだよ？」

「さあ……。わしにもわからん。

プエルはたまにいなくなるからのう」

俺は（今日はやけにジジイみたいだな……。）と思った。

「なんかいないと困ることでもあったのか？」

「別に」

俺はそう言い、ほりコタツに入り座った。

「もしやお主……」

「？……。なんだよ？」

「プエルに惚れたか？」

ガイルのあまりの発言に俺は飲んでいたお茶をガイルに吐いた！！

「ゴホッ！！ゲホッ！！……ありえねえだろ！？エホッ……」

「そうじゃの……。言うだけ損じゃ……」

ガイルはそう言うのとタオルで顔を拭いていた。

「そついや、俺今日仕事入れる予定だったんだ。

クロームハウスに行ってくる」

俺はそうガイルに言い残しクロームハウスへ向かった。

「ようよう！！金貸してくんねえかなあ？」

「俺たち今日金なくて困ってんだ」

俺はハウスへ向かう途中に不良にからまれた。こついうことは日本でもよくあったからなぜか懐かしい感じになった。

（そついや聖どうしてんだろ？）

不良A「聞いてんのかよ！？兄ちゃん！！」

「いやまったく」

不良B「面倒だ！やっちまおうぜ！！？」

不良C「やった後に金盗ればいいんだからよ？」

なんか俺が弱いみたいに話す不良たち。・・・ちよっとむかついてきましたよ？

不良A「そうだな？ヒヤッハア！！！」

（倒すだけなら合剣はいらないだろ？）

なぜか合剣を出すことまで考えてしまっていたが今は目の前の不良を倒すことに専念した。

不良Aは腹をナイフで刺そうとするが、俺は軽く避けて腹に膝蹴りを当てる。

それを見て他二名は二人同時に襲ってきた。

俺はそれを容易く避け不良Bの首に力カト落とし、体勢を立て直し不良Cの恥部を蹴り上げた。

「弱いな・・・。これで恐喝するなんてな。

まあいいや。疲れたから家に帰ろう・・・。無駄足だったな」

俺は不機嫌なまま家に帰った。

「ただいま・・・」

俺は家に着いても苛立ちは消せずに玄関の戸を開けた。

「おかえり。もう夕方じゃぞ？そんなに依頼は大変じゃったのか？」

「不良に襲われてボコボコにして帰ってきた・・・」

正確には1撃ずつしかいれてないのだが、そこは黙っておこう。

「それでハウスに行かなかったのか？バカじゃのう・・・」

もはや怒る気にもなれない。

「腹減った・・・。メシは？」

「今作っている。もう少し待て」

この家の食事当番は1日ごとに交換することにしたらしい。

「はいよ・・・。ん？プエル帰ってきたんじゃないのか？」

「まだ帰ってきてはあら・・・。心配がするのう」



俺はいつのまにか人の気配を読むことが出来ていた。危険な依頼をやらされて得た力だろう・・・

（ただいまぁ・・・）

玄関からプエルの声が聞こえた。帰ってきたらしい。

「お帰りプエ・・・ル。」

俺は玄関に行きプエルを迎えようとした。しかし、温かく迎えることはできそうにない・・・

血を流し玄関にもたれかかるように倒れていくプエルを見て俺は

「ガイル！！医者だ！！！！医者呼べ！！」

とガイルに叫んだ。

「なんじゃ？騒がしい。どうかしたのか？・・・プエル」

「いいから早く！！このままだと死ぬぞ！！？」

俺がそう言つとガイルは急いで家を飛び出し医者呼びに行った・・・

ガイルが出て行つて3分後ぐらいにプエルはうわ言のように呟きだした。

「お父さん・・・。お父さん・・・。」

（お父さん？）

俺はその意味がわからなかった。

「プエル？」

「お父さん・・・。あたしは人間のままでいたい。・・・には・・・た・・・ない」

「！！！！」

俺は今の言葉を聞いて自分の耳を疑った。俺の耳がおかしくなつてしまつたのではないかと。

（人間のままでいたい！？どういうことだ？プエルは人間じゃないのか！？）

様々なことが頭に浮かぶ。

そんな時にガイルが医者を連れて帰ってきた。

「連れてきたぞ！！プエルは！？」

「ここに寝かせてある」

「そうか……。ゼシルド！！早く見てくれ！！」

ガイルがゼシルドと言った男は22・3歳くらいで整った顔立ちをしている。

「ああ。わかつている！」

ゼシルドは聴診器を耳にかけ心臓の音を聞こうとプエルの上着を脱がせる。

「っ！！俺茶の間にいるよ……」

俺は居たたまれなくなり部屋を後にした。

数十分すると、ガイルとゼシルドが茶の間に来た。

「どうだった？」

「精神的疲労が凄い……。肉体的疲労がないとはいえ血を流しすぎている。

危険な状態だよ」

「俺、なんかすることあるか？」

「残念ながらこれは本人の体力や精神力の問題だ。他人が助けられるものではない。

それに素人が無理になんとかして容態が悪化したら大変だ……」

ゼシルドは冷静に言う。

「とりあえず、明日またくるよ。容態が悪化したらすぐ呼んで」

ゼシルドはそう言い帰った。

「なんでプエルがあんなケガしてんだよ……？」

「まだいいほうじゃ……。お主がくる3ヶ月前なんて、間違いないく死んだと思ったよ。

あれは」

「【あれ】？」

「そう」

なぜかガイルは話さなかった。話したくなかったのだろう。俺も無

理に聞こうとは思わなかった。

「・・・プエルはのわしを拾ってくれたんじゃ」

「拾った？お前捨て子だったのか？」

「そうじゃ。そのときのプエルは殺気の塊のような女じゃったがな・

・・・」

俺はプエルを恐ろしく思った・・・

「とりあえずは、プエルが目を覚ますのを待つだけじゃな・・・

メシでも喰おう。腹が減って餓死したら意味ないからの」

「ああ。そうだな・・・」

俺とガイルは二人で冷たくなった夕食を食べた。

## 幕間：欲望（前書き）

話の間に詩を入れました。変な詩ですが頑張って書きました。

## 幕間：欲望

私は人間ではない 私は人間がいい

命があれば外にいける 軀からだがあれば自由になれる

軀が欲しい 自由が欲しい 心が欲しい・・・

思いが欲望になって形作る 私の家の守り番になる

友が出来た 仲間が出来た かりそめの軀で

この繋がりを消したくない

私の心 私の軀 私の自由 私の・・・

あの人は私を許さない 友を 仲間をつくった私を

そしてあの人は仲間を 私を殺すだろう

私は守る たった一人で 誰も巻き込まずに・・・

軀が欲しい 自由が欲しい 心が欲しい・・・

かりそめの軀 かりそめの心 かりそめの自由

すべてが本当で すべてが嘘

あの人を殺せば・・・ 仲間を殺せば・・・ 自分を殺せば・・・

すべてが戻る　すべてが現実になる　すべてが無になる・・・

軀が欲しい　自由が欲しい　心が欲しい・・・

あの人は私を必要としている　邪魔な人を殺すために

私はあの人の人形　私は殺すために育てられた人形

軀が欲しい　自由が欲しい　心が欲しい・・・

子供を拾った　小さい子供　無邪気な子供

私についてくる　こんな私でいいのなら連れて行くよ？

異世界から来た少年に会った　私と同じだろうか？

その少年にいろいろ教えた　殺すこと意外知らない私が

この繋がりを消したくない　私は守ってみせる　この繋がりを

軀が欲しい　自由が欲しい　心が欲しい・・・

## 幕間：欲望（後書き）

指摘でもなんでもいいのでメッセージに書き込んでくれたら嬉しいです。

まだまだ未熟ですが頑張りたいです。

## 第14話：二人（前書き）

がんばって2日おきに更新してます。



## 第14話：二人

「なあ、なんで・・・」

「ん？何か言ったか？」

俺はガイルに言いたい事が言えなかった。

「いや、なんでもない・・・」

「そうか？」

この会話がずっと続いてる。

「プエルって両親いるのかな？」

俺はガイルに質問した。

「いるのではないか？ 呟くほどじゃからの」

（ガイルもあの言葉を聞いたのか？）俺はそう思った。

「なあ、プエルの【家】って何処にあるんだ？」

「ここではないか！何を言っておるのじゃ？」

「そうじゃなくて・・・ここに来る前の、生まれたときの家だよ」

俺はそこになにかあると思いガイルに場所を聞く。

が、ガイルは

「わからん。多分そこに手がかりがあるとふんでいるのじゃろ？」

と、あたかも俺の心を読んでいるかのように話す。

「血の痕をおって探すのもいいけど、時間がかかるしな・・・」

俺がそういうとガイルは

「そうか。それじゃ！」

と大声で言い出した。

「なんだよ！？大声出して」

「だから血の痕をおうんじゃー！！」

ガイルは真剣な顔で俺を見て言う。

「だから、時間がかかりすぎるだろー！！」

「ふふふ・・・」

ガイルは含み笑いをしている。怖い・・・

「わしの精霊はなんだったかな？」

（なんで軽く敬語になつてんだ？）

「え」と……。地　だつたっけ？」

俺は思い出すのに3秒ほどかかったが思い出すことが出来た。

「そう。だから、精霊に頼んで血の痕を追ってもらうんじや。来い  
！！」

そう言いガイルは外に出た。

俺はプエルをベッドに寝かせ外に出た。家の施錠もちゃんとして！！

『我に託されしは堅固たる地の力。我の命を聞き入れ我に従え』

ガイルがそう言うのと小さい岩　石と言つてもいいだろう  
を召喚した。

（ガイルが言うのと違和感ねえな……。）

俺はそんなことを考えていると

『我が仲間プエルの血の痕を追え』

そう言うのと岩は中空に浮かびながら俺たちを導いた。

歩いていくと町を出てトルナ草原に向かつていく。

「こんなに遠い所からプエルは歩いてきたのか……。

あの体で」

俺は驚くというより感心した。

「まだ歩くらしいな……。たくあの馬鹿者は我等に話せばよいもの  
を！！」

ガイルが怒る。

草原をだいぶ歩くと暗い森に入り、森を抜けると崖があつた。

「まさか……。？ここ登るのか？」

「そうらしいな……。できるかレンホウ？」

「自信薄……。だな」

俺たちのテンションは極端に落ちた。例えるなら、お笑いの有名人  
のネタの後に素人芸人が舞台上上った感覚だろう。

「ま、登るしかないんだろ？」

「そういうことじゃ。行くぞ！」

そう言い俺たちは崖を登った。

「これ……。突起岩がないから……。大変……。だ。」

「つべこべ言わず……。さつさと……。のぼ……。れ。」

登っているために会話も出来なくなった……

ようやく登り終わったら目の前に巨大な城があった。

「ほお……。立派な城じゃな」

「驚くのはそこじゃねえ！ここがプエルの【家】！？家じゃなくて城じゃねえか！」

俺はガイルにキレた。

「まあよい。行くぞ！」

（切り替え早っ！）

そう思いながら俺はガイルの後についていき、門の前まできていた。城の門はしっかりと閉まっていて入れそうにはない。

「ここは任せて。」

能力変換 身体強化 トリス！」

俺は言霊を発し4mはあるであろう門を軽々と飛び越えた。

「たくましくなったもんじゃな」

ガイルが言う。

「そりゃ1ヶ月もたって進歩なかったら逆に怖いだろ！まあいいや。ちよつと下がってる」

俺がそう言うとガイルは軽く頷いて5・6歩下がった。

「能力変換 衝撃 トリス！」

俺は片手を前に出して言霊を発し手から出た衝撃で城門を吹き飛ばした。

ガイルは俺が吹き飛ばした門を見て

「かなりの威力じゃったな」

と驚嘆の吐息をもらした。

門の中は中庭に通じてあった。しかし、ゆつくりと歩いてはいることはできないらしい。

俺とガイルは背中合わせになり中庭の真ん中にいた。周りには全身が緑色の人の形をした化け物が約100体ほどいる。

「とりあえずはこいつらを片づけねばな」

「そうだな。行くか」

ガイルは大剣に俺は曲刀に変化させた。

「このごろはお主は曲刀をよく使うな」

「曲刀が1番使いやすくてな」

そんな会話を少ししたら俺たちは正反対の方向へ走り、敵を倒していく。

俺は曲刀で敵の首や足を切り落とし、ガイルは大剣で敵を殲滅していく。

50程の敵を倒すとさすがに疲れが溜まりはじめ太刀筋が遅くなってくる。

「さすがに疲れる……。たたく多すぎなんだ……。よ!!!!」

「話をする暇があったら1体でも多く倒せ!!」

ガイルはそう言いながら敵を殲滅していくが、俺の疲労はピークに達していた。

（使いたくなかったが……。仕方ないか）

「ガイル。もういい。扉の前にいてくれ」

「なぜじゃ!」

「【あいつ】を呼ぶ」

ガイルは驚いた顔になったがすぐに状況を理解して扉の前に走った。『我に託されしは大いなる殺戮の使者。我の体を汝に捧げる。汝の

力存分に発揮せよ……

【トリス】」

そう言い俺は意識を消した。

ここからは作者視点でお楽しみください

蓮崩が意識を消すと髪がオレンジに変わり、殺気が溢れ出した。

「今回だけお前の言うことにしたがってやるよ！宿主さん」

（化け物だけを倒せ。そうしたら終わりだ）

「りよおゝかあゝい」

精霊【トリス】は馬鹿にしたように返事をして姿を消した。

正確には消えたわけではなく目には見えない速さで移動しているのだ。

「全然弱えなあ！！ヒヤハハハハ！！！」

トリスは狂気に侵されたように笑いながら次々と敵を殺していく。化け物は5分経っただろうかという短い時間ですべて皆殺しにされていた。

「まあ楽しかったぜえ……。じゃあな」

そう言うトリスは意識を消し蓮崩に戻った。髪の色も。

蓮崩視点に戻ります

（凄まじいな・・・）

俺はそう思いガイルの所へ行った。

「相変わらずじゃったぞ」

「わかる。今回は見えたよ」

俺たちは扉の前に座り軽く体力を回復しながら会話をしていた。

「そろそろ行こうぜ・・・」

俺がそう言う

「そうじゃな」

とガイルが言い、扉を開けた。

扉を開けて中を見てみたらそこには信じられないものがいた・・・

## 第14話：二人（後書き）

多くの読者に楽しんでいただけるように頑張っております。  
無駄かもしれませんが絵師さんを募集しております。  
やってみたいという人はメッセージに書き込みお願いします。

## 第15話：戦闘

扉を開けて見えたのは、だだっ広い廊下。鎧は横に並べられている。そして奥が見えない通路。

【左右対象シンメトリー】とはこのことをいうのだろう。

けれど現実はどうじゃなかった。

短い通路があり扉がなく柱を境に上り階段と下り階段がある。

そして、柱の前には10歳ほどの女の子が2人・・・

「なあガイルこの屋敷の主人って・・・」

「奇遇じゃなわしも同じことが浮かんた」

俺とガイルは口を合わせて

「「ロリコン？」」

「違います。私たちは魔導で動いている人形です」

一人の子供は感情がない声で冷静に話す。

「ここからは1人ずつで行ってもらいます」

俺達は意味がわからず頭に疑問符を浮かべた。

「じゃ、片方の階段を選べってことか」

「はい」

子供は優しく微笑む。俺はロリコンではないので興味がない。

「じゃ、わしは上りを行くぞ」

「じゃあ、俺は下りか」

俺たちは軽く手を合わせ無事を祈り一人ずつ子供の後に続いた。ガイルと子供はさながら幼馴染のデートのようだ。

階段を下りていくとそれこそ俺が思っていた通路が現れた。

「なんで2つの道があるんだ？」

俺は子供に質問をする。実際作り主に会って聞いてみたいほどだ・・・

「さあ・・・。私はそのようなことは教えられていないので」

（なるほど・・・。最小限のことを教えるだけなのか）

俺は納得して歩いていると扉が見えてきた。

「どうぞ。ここからは私の案内は必要ありません。一本道ですので」  
子供はそう言うのと深々と頭を下げ、きた道を歩いて帰った。

俺は扉を開け部屋に入った。

この部屋はクロームハウスの昇格テストの部屋に似ている。

正方形の部屋だが唯一違うのは真ん中にある柱とそれに付いている部屋の端まで火炎球が届くであろう重火器。

（ここで一体何を？まさか拷問か！？）

俺がそんなことを考えていると部屋の天井についてあるスピーカーから声が聞こえた。

「ようこそお客人。私がこの城の主【デュノン・デル・シエル】です。これは私が楽しむための部屋です。お客人も楽しんでいただければ結構です」

（異常だな・・・）

俺がそんなことを考えていると奥の扉が開き人間より少し大きい（推定3m）人が出てきた。

「さあ、お楽しみください」

「たく！能力変換・・・」

バチッ！！

強力な電磁音がして詠唱が途絶えた。

「言い忘れていましたが、この空間は魔導が使えませんので」

（先に言え！！）

俺は気分を切り替え、拳を握り敵に向かって走り出した。

敵は軽くそれを避け俺の腹に蹴りを繰り出す。

俺は蹴りを両手で受け止めるが敵はお構いなしに振りぬく。

俺は壁に叩きつけられそうになるが体を回転させ壁に足をつき、壁を蹴って敵の顔を殴る！

だが、違和感を感じた。まるで岩を殴ったような感触。俺は敵から



出る殺気を感じ取りすぐに敵から降り後ろへ飛び退いた。

（なんだ！？こいつの固さは）

俺は不思議に思った。硬度・殺気・力。

どれも人間のそれよりはるかに高い。

「グウオオオオ！！」

竜の如く唸り声をあげると地面を殴り、割った。

よくわからないがこれを好機と思い俺は顔面に飛び蹴りをしようと跳んだ。

が、敵はこれを予測していたのか跳んできた俺の足を掴み地面にたたきつけた！

「ゴハッ！なんつー力だ！」

俺は口から血を吐いた。背骨が折れそうだったが、これ以上くらは危険！と判断し敵の手から脚を抜き壁に背中をつけた。

（魔導さえ使えればな・・・）

俺がそう思っていたらスピーカーから声が聞こえた。

「見るにたえませんな。お客人、スピーカーを壊してください。そうすれば魔導が使えますよ」

「本当か・・・？」

俺は敵の蹴り・拳をなんとか避けながら会話をする。

「本当です。スピーカーには私の魔導が込められていますからそれを」

ガシャン！！

俺はすべてを言い終える前に敵の肩に乗り上に跳びスピーカーを蹴り壊した。

「これでオッケー！トリス！」

俺は言霊を発し合剣を出し、大剣に変化させた。

「これで終わりだ！！」

引きずるように大剣を持ち敵に向かって走り、俺は敵の足を切り落とした。

敵は崩れるように倒れ灰になった。

「やっぱり人間じゃなかったか。」

途中から気づいていたが灰になったことで確信できた。

（それよりあの重火器はなんのいみがあったんだ？）

俺は考えながら灰の中から鍵を見つけ来たところと反対側に位置する扉をあけた。

「……………ここからはガイルの視点です……………」

「やれやれ面倒な城じゃ」

わしはそう思いながら通路を進んでいく。

「あなたお年は何歳？」

「10歳だが……。それがなにか？」

女の子はわしに年を聞いてきたがそれ以外会話はなく扉の前にきた。

「では、これより先は一本道ですので」

「さつきも一本道ではないか」

「本来は魔導の罠が張り巡らしてあり迷路になるのです。多分さきほどいた人も同じ場所を通るのでは？」

わしは意味がわからなかった。そんなことも知らずに女の子は微笑んでいた。

扉をあけると円形状の部屋があった。すると奥の扉からいかにも武闘派という感じの男が出てきた。

「我が名はモース。さあ、我と一騎打ちを」

モースと名乗る男は戦闘の構えにはいりわしを待っていた。

「ここでは魔導は使えん！無駄なことはやめて死ぬのも美德だぞ」

「面白い！その自信打ち砕いてやろう！」

わしは拳を握り、構えそしてモースに向かって走り出した。

モースはそれに合わせるように拳を繰り出してくる。

（なるほど。これはレンハウでは避けきれん。こっちでなくて良かったのうレンハウ）

わしは紙一重でそれを避け腹に拳を数発。足払い。そして倒れたところ、肘打ちを流れるようにたたき込んだ。

モースはそれで気絶したらしい。

「ふん！【GEIST】（ドイツ語で亡霊の意味）の破壊神。ガイルを甘く見たのが運の尽きじゃな」

レンホウには言っていないが、わしとプエルはSSランクのペア【GEIST】なのじゃ。この名前を出せばほとんどの人間は知っているというほど有名じゃ。

だが姿を見たものはいなく、それ故にGEIST（亡霊）と呼ばれるようになった。

そんなことはさておきモースの腰に付いていた鍵を奪いわしはその部屋を出た。

## 第15話：戦闘（後書き）

GEISTの読みかたはわかりません。

こんな話を読みたい。というのがあればリクエストを受け付けてます。

## 第16話：激怒（前書き）

昨日は諸事情があり更新できませんでした。  
文章を少し変えて書きましたので混乱するかもしれませんが多分大丈夫だとおもいます。

## 第16話：激怒

扉を開ければさっきとなんら変わらない通路がある。

そこを歩いているとなにやら笑い声が聞こえた。

クスクス・・・ ケタケタ・・・

怒りの感情が沸き上がってくる。この笑い声のせいだろうか？

大分歩くと直角の曲がり角があった。奥には気配が一つ・・・。

相手も俺のことを察知したのだろう。気配が消えた。

俺は戦闘体制に入り合剣を曲刀に変化させ足音を消し曲がり角に近づき身を隠す。

曲がり角から体をだし切りかかろうとした。そのとき！

勝負は一瞬だった。ガイルの拳が見事に腹にクリーンヒット。うづくまる俺を見てガイルは一言

「なんじゃ。お主が」

殺してえ・・・

ガイルは敵かと思い殴ってしまったらしい。まあ許してやろう。俺も襲ってしまったから。

「そっちはどうじゃった？」

「どうって何が？」

「戦ったのか？という意味じゃ！」

面倒くさいがガイルに戦った相手のことを話す。

「厄介じゃったの。ここを出て2・3日したら体術の修行をしてやる」

断固拒否したいが俺に選択権はないだろう。

そんな話をしながら奥に進んでいくと、壁全体が扉の前に来ていた。

「これ開くのか？」

「やってみなければわからんじゃろ。手を貸せ！二人で開けるぞ」  
ガイルと協力して扉を押すがびくともしない。

（ぶっ壊してやろうか？）

トリスの声が頭に直接流れ込んでくる。

「いらねえよ。俺たちだけで充分だ」

実際二人だけでは足りないがトリスの力は借りたくない。俺の癪にさわる。

「あいつか？」

俺が頷くとガイルは

「精霊なのに話せるとはな」

話すことは慣れたが話すとムカつくから話したくない。俺がそう言う  
とガイルは

「ハハハ。大変じゃのう。それにしてもこの扉はなんじゃ？全然動かん！」

ガイルが愚痴っぽく話すとさっきまで聞こえていた笑い声が変わした。

（ねえ、困ってるよ？クスクス・・・）

（助けてあげようよ。ケタケタ・・・）

寒気がした。蛇が首に巻き付き舌なめずりをしているような嫌悪感のような寒気が。

笑い声がおさまると横に並べられていた鎧が二つ動いた。

俺とガイルはすぐに戦闘体制に入った。

だが鎧は

（僕たちは手伝ってあげるだけ。危害を加えるつもりはないよ）

と子供のような声を出し、扉の前に立った。そして二つの鎧は扉を押し、開けた。

完全にそれを開けたら鎧は二つとも倒れた。

扉の奥には豪華絢爛と言うのだろうか？部屋の至るところに装飾品や肖像画などが飾られている。そして扉を開け真っ直ぐ奥まで歩く通路には血を吸わせたような色の赤絨毯。奥には段差があり上りきったところには玉座が一つ。そしてそこに座っているのは、黒い口

「ブを羽織り、黒い長髪。口には牙。そしてプエルと同じ血のような赤い瞳。そしてとめどない殺気を放つ男がいた。」

「よくここまでくれましたなお客様」

「あんたがデュノンか？」

男に問うとそうです。と頷く。

「お客様どうでしたかな？楽しんでいただけましたかな？」

もちろん楽しめるはずはない。だがそんなことをこの男に言っても意味はないと知っている。

（能力変換 身体強化 トリス・・・）

言霊を吹き俺は一気にデュノンとの間合いを詰めるが、見えない壁に当たり近づけない。

「レンホウ！・・・なんじゃ？この見えない壁は」

「壁ではありません。「斥力」です。物体を遠ざける力ですよ」

デュノンは余裕の顔で俺たちを見る。いや、見下している。

「魔導だな・・・」

「さすがお客様鋭いですな。どうです？殴り合いなどせず食事でも？食後のワインは格別なものをご用意しますが？」

デュノンは自分の力を教えてまで余裕の姿勢を崩さない。いや、その力すらどうでもよいものなのかもしれない。

「食後のワインとは？デュノン公爵」

ガイルが問いかける。そして返ってきた言葉は

「もちろん《処女の生き血》ですよ」

ブツッ

俺の中で何かが切れた。そして溢れた感情は殺意！

（殺す・・・）

「何か言ったか？レンホウ？」

ガイルが何かを言っている。

もう蓮崩の耳には入っていない。

殺す。殺す！殺す！！

デュノンとの間合いを詰めるが、また斥力に邪魔をされ前に進めな



い。

「消える・・・」

変換 消失 トリス」

斥力の壁を消し去り間合いを詰める。

「レンホウやめろ！その男はプエルの父親じゃぞ！！」

ガイルが何か言っている。もう俺には聞こえない。

「危険なお客人だ。消えていただく！」

『影より生まれし闇の長<sup>おさ</sup>全てを滅せ！！』

「特殊魔導じゃ！下がれ！レンホウ」

デュノンの影から出てきた黒い剣は俺を刺そうと向かってくる。

「『我が命に従いて現れたるは輝きを失った聖者。冥府を彷徨い得た力、今悪鬼となりてもたらさん』」

詠唱が終わり影から堕天使のような姿の何かが出てきた。

「なんじゃ？この魔導・・・。レンホウのものではない。トリスか？」

「心配するな。俺だ。蓮崩だ」

ようやくガイルの声が聞こえる。怒りが収まってきたらしい。

堕天使はデュノンがだした黒剣を止め、その剣を自分の武器にかえデュノンを刺した。

「なかなかですね。お客人・・・」

「知らねえよ。それはキレてる時に出したんだからな」

（なるほど・・・。つまりあれは偶然の産物。運も実力のうちと言  
うが・・・。）

あの魔導はわしが知る限り【魔】の属性最強魔導じゃ。しかもそれを扱えるのは魔族のみ・・・）

ガイルは皆に聞こえないように呟いた。

デュノンを刺している黒剣が消え、間をおかずに堕天使も消えた。

デュノンは片膝をつき肩で息をしている。それほどの威力だったのだらう・・・。

「はあ、はあ・・・。このガキがあ・・・！！！！ゆるさねえ・・・」

デュノンの性格が一変した。

ガイルは何かに気づいたように

「レンホウ！こっちへ来い！！殺されるぞ」

デュノンから殺気があふれガイルの声が聞こえた。俺は危険と判断し、段差を飛び越えガイルの隣に着地した。

デュノンを見上げるともはや人間（吸血鬼）の姿とは思えない。

体が4倍に膨れ上がり破裂。そして霧散した体は玉座の前に集まりなにやら形作っている。

黒い球体。そこから生えた6本の足。そして顔には血のような赤い眼が三つ。もはや蜘蛛と言ったほうがいいだろう・・・

「ガイル・・・」

「なんじゃ？」

「俺、蜘蛛かなりダメなんですけど・・・」

「しかしこのままでは殺されるぞ？腹を括れ」

そんな会話をしたあと、俺たちは剣を出した。

ガイルは大剣・俺は長刀（魔導を帯びることが可能にしたもの）に変化させ構える。

チキ・・・チキ・・・チキ・・・チキ・・・

蜘蛛は何かを言っている。そして、行動に移った。

## 第16話：激怒（後書き）

作者は蜘蛛は嫌いです。それはもう嫌です!!  
見つけたら後ずさりするほど嫌です。  
感想・批評をお待ちしております

## 第17話：決着

「能力変換 衝撃 トリス。《帯びろ》！」

長刀に魔導をかけ強化を施し元吸血鬼デュノンに近づく。

チキ・・・チキ・・・

蜘蛛は払うように一本の足を振るう。

俺は刀を振り降ろし刀の先から圧縮した衝撃を放つ。

「ほう・・・。そんなことが出来るようになっていたとは驚きじゃな」

ガイルはそう言っているが別段驚いてはいない。ちよつとム力つく・・・。

「衝撃の刀だ。刃は当たらずとも衝撃が当たるぞ！蜘蛛野郎」

衝撃で蜘蛛の足を止めガイルが足を切り落とす。

という作戦だったか蜘蛛は粘着性の糸を吐き出し俺の腕を絡める。

「レンホウ！おのれ・・・。死閃煉獄衝！」

ガイルは大剣振り降ろし糸を切り刻む。この技はおそらく超高速で剣を振り降ろしてカマイタチを発生させる技だ。一回しか振り降ろしてないように見えるのはガイルの剣の振る速さが速すぎるためだろう。それにしても大剣をそんなに速く振れるのは凄い・・・。もうバカと言いたい。

まあ、それはおいといて。

糸が切れ自由になり俺はもう一度衝撃を飛ばす。

衝撃は蜘蛛の眼に当たり一つの眼を潰すことが出来た。目の前の光

景はまさにスプラッターショー。

吐き気を催したがなんとかこらえ蜘蛛に向かって走り出す。

「まったく。眼を潰されても生きているとはな・・・」

ガイルが呟く中俺は思った。

眼を潰されても生き物は死なない。そんな簡単に死ぬなら竜討伐も苦労はしないだろ・・・。と

キシヤアアアアアア！！！！！！

耳をつんざくような叫び声を聞き、耳を塞ぐ。しかしこの行動が仇になった。ガイルが何かを言っていたが耳を塞いでいたために聞こえず死角の背中から来る攻撃に反応が一瞬遅れた。

横に跳びなんとかかわすが足の先端がわき腹に当たり肉をえぐる！

「レンホウ！」

ガイルが叫ぶが今の俺は激痛のあまり声すら出せない。

蜘蛛は頭を喰おうとこっちに来る。こんなには喰われたくないなあ……。

そんなことをのんきに考えているともう蜘蛛は眼の前にきていた。

三つある眼のうち一つは潰れ紫の体液を流している。

俺は刀を離し蜘蛛の腹の下に潜り込み言霊を発し衝撃を放つ。刀に帯びさせていたのも衝撃だが能力を変えてなければ効果はそのままだ。

蜘蛛は一瞬体が浮いた。ガイルはその隙をつき蜘蛛の背中に乗る。

「これで終わりじゃ。レンホウ早く腹下から出てこい。潰れるぞ」

「わかってるよ……。トリス！！」

誰もいないところに衝撃を放ちその反動でなんとか蜘蛛の下から出られた。

「よし。くらえ！【地影天墜】（ちえいてんつい）！」

ガイルは天井近くまで跳び上がり——この部屋の地面と天井の高さは目測約8m蜘蛛の体長は4mほど——体を回転させながら落ちてくる。目は回らないのか？

そして蜘蛛の背中に大剣をたたき込む。そして蜘蛛は……

見事に粉々に飛び散った！紫の体液を周りに飛ばして。そして俺は思った。

……泣いて良いですか？

わき腹の痛みに耐えながらも恐怖する。飛び散った生き物ではなくガイルに。

「ふうー……。レンホウ大丈夫じゃったか？」

心配そうにガイルが話しかけてくる。

「ダイジョブなわけねえ！わき腹えぐれてんだぞ！？つつつ・・・」  
無駄に叫んだため体に激痛が走る。

「能力変換 癒し トリス」

言霊を発し体を癒しながらだが説明しよう。魔導は集中力さえあれば上級魔導も使えるらしい。プエルがいう話ではだが。

とりあえずの応急処置だけはすませたがさすがに痛みはある。

なんとか立ち上がり体を動かす。よくよく体を見ると全身が紫だ。

これは怖い！ゾンビと言っても誰も疑わないほど怖い。

「ハハハハッ 凄いいことになっておるぞ」

ああ、殺してえ……。貴様が原因なんだぞこの野郎。

瞬時に思った。

「ったく。能力変換 水 トリス！」

手を天井にかざし言霊を発し水球を天井に放った。

それは天井にぶつかり破裂して雨に変わった。俺は雨で蜘蛛の血を洗い流した。

「能力変換 風 トリス」

そして風を周りにおこし濡れた服・髪を乾かした。魔導は日常生活でも使えるから覚えておいて損はないらしい。魔導式を書いたときの痛みを我慢できれば・・・。

「なんじゃ戻ったのか。面白かったのに」

このごろガイルの性格が悪くなってきた気がします。元々の性格なんでしょうか？

そんなことを考えながらガイルを見るととても悲しい顔をしていた。

「どうしたガイル？」

「わしらはプエルの父親を・・・」

「あつ・・・」

「どうすればいいんじゃない？」

無言の時間が流れる。

そんな時入り口の通路の奥から足音が聞こえる。

ヒタヒタ・・・

裸足なのだろうか？足音は極めて低い。

「誰じゃ？」

「わからない」

歩いてくるものを待っている。そして見たものは中庭で見た全身緑色の化け物。それも一回り大きいものが歩いてきた。

俺たちはすぐさま戦闘体制に入った。ガイルは足元に置いてある大剣を持ち、俺は少し前にある刀のところへ行きそれを拾う。そして俺たちは化け物を見た。だがそこにいたのは、通路いっぱい緑の化け物だった。

「どこにいたんだ！？こんなに」

「大方、天井にでも擬態していたのじゃろ！行くぞ！死閃

「待てガイル。なにか言ってる」

俺たちは攻撃をやめ声を聞いた。

（ありがとう・・・）

（これで自由になれる・・・）

（心がもどる・・・）

（軀は朽ちたと伝えてくれ・・・）

「どうということじゃ？」

「俺が知るかよ・・・」

化け物たちはそういうと幻の如く消えた。そして俺たちは城を出た。

## 第18話：討伐

城での出来事から約一ヶ月が経った。この一ヶ月の間に俺はAクラスにまで上がった。

あの一件以来プエルは明るくなった。

ん？父親を殺したから暗くなるはずだって？それがプエルはこう言うてくれた。

「あのね、お父さんやあたし。つまり魔族はこつちの世界じゃ死なないの。魔界に強制的に戻って力を蓄えるのよ。3年くらい」  
ものすごいアバウトな説明だった・・・

朝、俺は食事当番だったため早く起き朝飯を作った。

といっても簡単に白米と味噌汁。それにオカズを3人分。

しばらくすると寝ぼけ眼でガイルが起きてくる。ちなみにガイルは寝ぼけていると普通の子供のしゃべり方になる。いや、戻るといったほうがいいのか？

「おはよぉ・・・。あれ？プエル姉ちゃんは？」

とまあ、こんな感じに。最初聞いたときは持っていた味噌汁鍋をひっくり返すぐらい驚いた！

プエルは朝の寝起きは最悪だ。このごろは

「プリンってカッコいいよねえ・・・」

という訳のわからない寝言を言い出すほどだ。仕方がないから俺が起こしに行くことになる。

プエルの部屋はまさに女の子という感じの部屋だ。説明しづらい・・・。

「プエルー。朝だぞー。おーきーろー！」

「あとごぶん・・・」



ベタだ……。まあ五分も待つてるほど俺は優しくない。

「早く起きないとスゴイことするぞ？」

「すごいことつてどんなことおゝ……。…」

別に考えていない。けど早く起きてほしい。

「キスしてくれたら起きるかもおゝ……。…」

何を言っているんだこの吸血鬼。へたにキスして血ぬかれたらどうする。

そう思いながらもプエルに近づく。

「キスしてくれるのぉ？」

(能力変換 音 ……)

そつと呟く。そして

「トリスー!!」

コケコツコーー!!!!!!

「うひゃあ!？何!!フギャー!」

あたりに鶏の鳴き声が大音量で響きわたる。

「おはよう。寝ぼけ吸血鬼」

軽く皮肉を入れ朝の挨拶をする。プエルは驚きのあまりベッドから落ちたようだ。

「痛ったたた……。なにすんのレンホウ!」

「すぐ起きないおまえが悪い」

そんな会話を少しした後、部屋を出て食卓に向かった。食卓にはガイルがテーブルに突っ伏して寝ている。

こいつもか……。ま、ガイルは子供だから……。…。

大人からみればプエルも子供だが俺と同じ年なので容赦はしない。

「ガイル。寝るな。飯食うぞ」

まあ、そんなこんなで一日は始まった。

ピリリ……。ピリリ……。…。

珍しくクローム用の携帯が鳴り出す。携帯を取り通話ボタンを押し

た。

『レンハウ君か?』

「はい。そうですけど……。どうしたんですか?」

電話の相手はクローム全権指揮のギルドSTEM・ファルクからだ。

『いや、他の二人に言えばわかると思うが クリムゾン がダルナ山脈に現れたんだ』

「くりむぞん?」

その単語を聞いた二人は驚いていた。

『ああ。全クローマーはそれを討伐してくれ。報奨金は100万ギルドだそう』

「わかりました。この依頼にクラスは関係あるんですか?」

『Aランク依頼だ』

「了解。じゃ失礼します」

そう言い携帯をとじる。

二人を見るとなにやら討伐の準備をしている。やる気マンマンだな・。。

「なあクリムゾンってなんなんだ?」

「竜よ。人語を話せる」

「あやつは別名や異名が多すぎるからの。体色が<sup>あか</sup>紅色なのでクリムゾンと呼ばれている」

「他にはどんな呼び名が?」

「竜帝・神竜・紅の牙そして、烈火……」

烈火……。その名前には聞き覚えがある。俺は小さい頃親が移る度名前が変えられていた。そして、毎回つく名前が烈火……。

俺はその名前がイヤで蓮崩に名前を変更した。が元の名前は烈火だ。このことは俺以外は誰も知らない。

「ダルナ山脈だつてよ。クリムゾンがいるところ」

俺は二人に教え、行く準備をする。と言っても別に服も恥ずかしくない程度のを着ていけばいいだけ。

準備が終わり俺たちは北。ダルナ山脈を目指す。

山についた俺たちはひとまず休んだ。竜の気配もしないから安心だろう。

休んでいるときに他のクローマーにいちやもんつけられるのが気に入くないが・・・

「どうした僕たち？早く帰ったら？」

うぜえ・・・

「あらあ、子供じゃない？あなたたちこんなところにいちやダメよ？あら？クローマー？ごめんなさいね」

うぜえ！

「死ね！クソガキ！」

うっぜえ！！もうダメだ。殺す！

「やめなレンホウ。無駄に体力使うよ？」

プエルに止められた。まあそうかもしれないから休んでおこう。

「レンホウ！？もしかして疾風はやてのレンホウか！？」

「なにそれ？」

俺は驚いているクローマーに聞く。すると

「クローマー内で噂の男さ。たった2ヶ月でAランクまで上り詰めた男ってな」

そうだったのか・・・？知らなかった。

男に悟られまいと無表情で考えていた。その時！

（ウワアアアアア！！！！）

（ギヤアアアア！！！！）

悲鳴が聞こえる。竜・・・クリムゾンに襲われたのだろう！俺たちは急いで山を登る。

「能力変換 身体強化 トリス」

「能力変換 身体強化 ブルー・レスト」

「能力変換 身体強化 ダスクドル」

俺たちは魔導を自分にかけて山を登っている。最近知ったことだがガイルも魔導が使えるらしい。子供は集中に時間がかかるから使いづ

らしいからあまり使わないとガイルは言っている。

「たく、なんだって山の入り口で休んでたんだ！」

軽くグチをこぼす。

「いいから急ぐ！」

プエルに怒られた・・・。

人が多くなってきた。もうそろそろつくのだろうか？

そんなことを考えていたら上から岩が降ってきた。

「くつ。変換 衝撃 トリス！」

魔導を変え岩に衝撃を当て粉碎した。しかしまだ岩は降ってくる。

「埒があかんぞ？」

「確かに・・・。ここからは歩いていこう。岩を避けながら」

プエルが言う。そういえば 情報屋 アーバスに聞いたことがある。

山には 岩降地帯 といって岩が無数に降る場所があると。

そんなことは関係ない。今は一刻も早くクリムゾンのもとへ行こう。

そう思い俺たちは岩降地帯を走り抜ける。

## 第18話：討伐（後書き）

今作者は夏休みの宿題におわれています・・・

## 第19話：運命

歌が聞こえる・・・

月の光がわたしを照らす・・・

闇夜の風がわたしを切る・・・

それはひどく悲しい運命の唄・・・

人の命はとももろい。あなたの命もまたしかり・・・

あなたに会いたい。あいたい。アイタイ・・・

「ーーーーう。レンホウ！」

プエルの声に驚く。

「！なんだ？」

「なんだではあるまい。ぼーっとして！  
ガイルに怒られ、走り出す。」

「今、【歌】聞こえなかったか？」

確かに聞こえた歌・・・。だが不思議に思い二人に聞く。

「歌？そんなものは聞こえておらんぞ？」

「私も聞こえなかったな！。魔族は人間より感覚が鋭いけど・・・」  
嘘だ・・・。あんなにはつきり子供のようなあどけない声が聞こえたのに。

歌が頭の中に残っている。ひどく悲しい運命の唄。  
なにかを振り切るように頭を横に振り走る。

だいが走つてようやく着いた場所は・・・惨劇だった。Aランクの人間が焼け焦げ、切り刻まれ、魂無き肉塊に姿を変えている。土の色は黄土から赤へ・・・。

竜・・・クリムゾンの大きさは人間と同程度。だが、牙・爪そして体は赤。命を喰らった者の証が偽りなく体にまわりついている。

「これがクリムゾン・・・」

「先に言っておくがこいつに勝つことはまず不可能と思え」

俺が竜を見ながら呟くと、ガイルが言う。

「なんでだ？」

「この竜は過去、伝説とまで謳われたクローマー3人が挑んでも付けることが出来た傷はかすり傷だけ・・・」

なら何故こんな依頼をクローマーに？

考えているとガイルが口を開く。

「こいつは・・・竜人じゃからな。殺しても魔界に戻るだけ。だが、伝説のクローマーでさえ傷はつけられない。つまり、倒せないということ。こいつは天災の一つと云われているほどじゃ」

早い話がおっぱえと言うことが。

考えながら深くため息をつく。

「いくよ！二人とも！！」

プエルはそう言うその後ろへ下がり援護に回る。俺が曲刀・ガイルは大剣をだし、クリムゾンに向かって走り出す。まだ生きている他のクローマーは援護に加わる者もいれば逃げ出す者もいた。

曲刀を振り降ろし切りかかると何やら声が聞こえる。

（命ってなに？大切？）

その声はあの歌の声と同じ声。違和感を感じながらも曲刀を翼に振り降ろす。

ガキンッ！！

なにかの金属を切ったような感触。翼に振り降ろした曲刀は宙を舞い山の岩肌に刺さる。クリムゾンを見たらゴミかなにかを払うよう

に翼を羽ばたかせている。

「バカが。奴の鱗は並ではないほどの硬度をもっている！うかつに切れば弾かれるぞ！」

弾かれた後に言われても困るものがある。

「なら・・・トリス！！」

衝撃を放つがびくともしない。不思議に思ったが俺以外誰も動いていない・・・

「なんで動かない！ガイル！プエル！」

「レンホウはこの声聞こえないの？動くどころじゃないよ・・・」  
泣きそうな声でプエルは話す。だが、その声すら聞き取りづらい。

「声？」

動きを止め耳をすます・・・。微かに聞こえてくるのは話し声。

（待ってよ！母様）

（レンホウ。早く来なさい）

（母様！僕の腕が・・・）

（大丈夫ですよレンホウ・・・。ほらこれで）

なんだこれ？【レンホウ】？【母様】？これって俺の記憶？いや違う！親が居るときはまだ俺は【烈火】だ。

考えていると頭がおかしくなってきたそうだ・・・。

「今はこいつの討伐に集中しろよ！二人！」

大声で叫ぶと二人は思い出したようにクリムゾンを見る。

「そうだったね！」

能力変換 水 ブルー・レスト」

プエルが中空に水の玉をだしそれを弾丸のような速さで撃ち出す。

そしてそれに合わせるように

「死閃煉獄衝！」

ガイルがかまいたちを放つ。俺は岩に刺さった刀を取りに行ってる真っ最中。

クリムゾンは黒い火球を吐き出し風をかき消し水を一瞬で気化させた。



「これが獄炎・・・」

プエルは驚いたように呟くと右に跳んだ。左に跳んだら山を落ちることになっていた。

ガイルも右に跳び獄炎とやらを避けていた。俺はようやく曲刀を抜くことが出来た。意外に深く刺さってたな・・・。

竜は降りてくる俺に合わせてくるように獄炎を撃ってきた。

「レンホウ！！」

二人の声が聞こえる。こんな所では死にたくない。

「トリス！！」

下に最大限の衝撃を放ち体を浮かせ獄炎を避ける。当たらなかったそれは青空に消えていった。

「ブルー・レスト！」

「・・・能力変換 雷 ダスクドル！」

プエルはクリムゾンの足元の土を水で沼に変えた。そしてガイルはクリムゾンに雷を当てた。さすがGEIST！

ん？なんで知ってるのかって？後で説明する。今は大変だから。

クリムゾンもこの攻撃には驚いた様子だ。だが、何故か奴は直接的な攻撃はしてこない。

（その女・・・）

低い声が辺りに聞こえる。その声の主は紅い竜からだ。

「あかし？」

（おまえ以外に誰がおる？他の人間共は逃げ出したぞ）

「嘘！？」

周りを見渡すがもう誰もいない。いるのは4人。ん？4人？3人と1匹？いや、ただ竜人だから4人か？

「なに百面相しておる？」

「ホントだ。どしたのレンホウ？」

「いや、なんでもない。そっちの話を続けて」

なんとかごまかせた。人数数えで悩んでたらバカといわれる。

（おまえからは魔界の匂いがする・・・）

「あたしは吸血鬼だから」

平前と答えているがこの世界で吸血鬼は災いの元らしい。

（父親は？）

「デュノン・デル・シエルよ」

プエルのフルネームは「プエル・ド・シエル」だ。

（そうか・・・。デュノンの娘か。母親は？）

「さあ？知らないわ」

そついや討伐しないのか？

少し考えた結果・・・。まあ、いいや。という結論が出た。

（知りたいのならば・・・

【夢眠る棚・真実の扉】を開けよ）

「なんだそれ？」

話を割って聞く。

（自分で調べよ。余は魔界に帰るとしよう。鱗をやるう。余にあれほどの傷を負わせた記念にな。余はもうこちらには来るつもりはない。では・・・楽しかったぞ）

そう言うときクリムゾンは鱗を一枚落とし、空へと消えた。

プエルを見ると悩んだ顔で考えている。

「どうした？プエル」

「いや、なんでもないよ。さ、ハウスに行って討伐完了の報告をしてこよう」

プエルがいつもより明るいのとは不自然だ。

思えばこのときが俺たちの運命を変えた時だったのかもしれない・・・

あなたに会いたい。あいたい。アイタイ。

ひどく悲しい運命の・・・  
唄・・・

## 第20話：別れ（前書き）

更新が送れて申し訳ありません。なにせ宿題が溜まっていますので・  
・。作者は学生です。

## 第20話：別れ

歌が聞こえる・・・

あなたは生きて　わたしは死ぬ・・・

ひどく悲しい運命の唄・・・

あなたは光　わたしは影・・・

あなたとわたしはもう会えない・・・

あなたに会いたい　あいたい　アイタイ・・・

「夢の棚、夢の棚・・・」

俺は、いや俺たちは今吸血鬼の城の図書室にいる。何故ここにいるのかは数時間前に遡る。

俺たちはハウスに行き100万ギルドを貰った。だが納得いかなかった。奴・・・クリムゾンは「もう来ない」

と言っただけだ。そして俺は奴に決定打を与えていない。それは置いといて。

家に帰った後にプエルが

「あのね、クリムゾンが言ってた【夢の棚・真実の扉】なんだけど

たしか城の図書室にあったと思うんだよね」  
と言って俺たちはまたこの城に来了た。

この城の図書室は『図書室』とは名ばかりで記録庫のような部屋だ。

部屋はカビ臭い。だが、本棚が無数にそれも規則正しく並べられていることから図書室と言っている。

「ガイルー。あったか？夢の棚」

本棚をはさんで向こうにいるガイルに聞く。

「あったらもう呼んでる。早く見つけろ！」

意味もなく怒られた。そのとき俺の携帯が鳴った。誰だ？ と思い通話ボタンを押す。

（あ、レンハウ。ちょっと奥の部屋に来て）

プエルからだった。奥の扉というのは重要な記録が保管されている部屋だ。ここにあるのは戦争の記録・神話等の本やレポート等が置かれている。

「？ わかった。スグ行く」

そう言い電話をきる。

「悪いガイル。俺、奥の扉に行ってくる。プエルに呼ばれてさ」  
そう言って俺は奥の部屋に行った。

奥の部屋は図書室よりは狭い。というより普通の部屋だ。部屋の真ん中には長テーブルが一個。外が見えないように本棚が並べられている。テーブルにはプエルが座っている。

「来てやったぞ」

少し不機嫌そうにプエルに話す。

「ありがと。あのさ、夢の棚なんだけど・・・」

プエルは言いづらそうに口を開く。

「なんだよ？ もしかしてここには無いってか？」

「・・・うん。ないんだ・・・」

案の定。思っていたとおりの言葉が返ってきた。俺は額に手を当

てため息をはく。

「正確にはここから行ける【魔界】にあるんだ」

意味がわからなくなってきた。魔界？　じゃあ、プエルは魔界に行くってことか？

頭の情報処理がオーバーヒートをおこしそうだった。なんとか整理できた頭を軽くはたきプエルに聞いた。

「じゃあ、行く準備をしろって事だな。じゃガイルにこのことを言ってくるぞ」

「待って！ガイルに言わないで」

プエルが俺の手を取り止める。

「ガイルだけ留守番か？　それは可愛そ　！？」

可愛そうだろ？　そう言おうとしたらプエルが腕を引っ張り俺はバランスを崩した。その刹那、プエルが俺の唇を奪った。

短い接吻が終わりプエルが口を開いた。

「これはあたしの問題なの。あたしだけで魔界に行く」

強気な口調だがその目には涙がみえる。

「だけど・・・　！！！」

引き留めようとしたが腹に衝撃をくらい俺は意識を失った。

「ごめんねレンホウ・・・。あたしは魔族だから・・・」

悲しげな言葉を言い残し彼女は消えた。そして、俺が彼女に会うことはもうなかった・・・。

もう会えないのだから・・・

頭の中に歌が聞こえる・・・

## 第21話：独りで

目を覚まし周りを見るとプエルはもういなかった。

「くそ……あのバカ!!」

言いようのない怒りの中俺は部屋を後にする。

図書室に戻りあたりを見回すがガイルがいない。不思議に思い大声で呼びかける。

「ガイル！帰るぞ。ガイルー!!」

叫んでも返事は返ってこない。ふと一つのテーブルを見ると手紙が置いてあった。

「なんだこれ？手紙か？」

その手紙はガイルからのものだった。俺はまさかと思いながら手紙を読んだ。

「レンホウへ

お主がこれを読んでいるということは魔界には行けなかったのじやろう？プエルは最初から1人で全てを終わらせるようだったからの。わしはプエルと同じように魔界へ行く。魔界は魔族ではないと行けないがこの前知ったことでわしも魔族じゃ。正確には【獣人族】という部類に入るらしい。だから背が伸びず……まあそんなことはどうでもいい。というわけでわしとプエルは魔界に行く。心配するな。死ぬことはない。ではまた会えることを祈ろう。

最後にごめんなさい……。」

軽い達筆だった読むことが出来た。

「なにがごめんだよ……。なにが獣人族だよ。何が祈ろうだよ!!」

静かに怒りがあふれてくる。ガイルやプエルではなく魔界に行けない自分自身に。

「ふう……仕方ない。とりあえずこの城から出るか。もうここ



に来ることもないだろう」

俺はもと来た道を1人で戻った。もう戻らない仲間のことを思いながら……

町に戻った俺はとりあえずクロームハウスに行った。

「仕事を受けたいんだけど……。No.8403 Aクラス 蓮崩だ」

受付の男に仕事を要請した。

「竜討伐がありますか……。どうしますか？」

「受ける」

「承りました。この依頼はハウスからの依頼です。すぐにトルナ草原に行つて結構です」

受付の男が言った【ハウスからの依頼】とは一般人からの依頼ではなくクローム内の依頼。つまり、クロームが依頼人というわけだ。

トルナ草原についたがかんじんの竜が見つからない。あたりを見回しても気配を探しても竜の気配は見つからない。誰か別のクローマーに倒されたか？

「グルルルル……」

そんなことを思っていたら竜のうめき声が上がって聞こえた。俺はすぐバックステップを踏み竜との間合いを開ける。

竜の大きさは推定50mこの大きさなら上位の竜だ。もちろん最上位竜はクリムゾンだが。

すかさず俺は剣を魔導刀（長刀）に変化させ竜に切りかかる。

「能力変換 破壊 トリス。《帯びる》」

破壊の力を刀に帯びさせる。がその間に竜が火球を吐き出してきてた。俺は反応が遅れ火球は左腕に直撃した。いつもは楽に避けられるのだが二人がいなくなつたショックから戦闘にも支障が出てきているのだ。

「くそ……。この野郎!!」

足を切りつけ魔導を発動させ右前足を破壊する。破壊された部分からは血がふきだしている。

「!!!!」

俺は頭の中になにか違和感を感じ攻撃を止める。聞こえてくるのはトリスとは違う声。

（本性をさらけ出せばいいのに……　こんな竜簡単に殺せるでしょう？）

頭を横に振り竜を前に見据える。だが声は止むことはない。

（ほら……醜い本性をさらけだしな？ 楽になるよ）

「うぜえ!!」

竜の攻撃を避けながら会話を続ける。

（そうか仕方ないねえ…　手伝ってあげるよ!!!!）

その瞬間俺の意識が消えた……

幕間：殺戮（前書き）

また詩を書きました。

読んでくれたら嬉しいです

## 幕間：殺戮

さあ殺せ

怒りの刃で 憎しみの刃で 殺意の刃で

愛しき者を 憎むべき者を 親しき者を

愛する者の喉元を 憎むべき者の身体を 親しき者の心臓を

すべてを壊し 独りになれ

本能のままに殺戮に身をゆだねろ

身体が軽い 頭がすつきりする

解放される抑制力 命を奪う快樂 血を浴びる清涼感

さあ殺せ

愛しき者を 憎むべき者を 親しき者を

誰よりも多く 誰よりも残酷に

命を喰らえ 魂を奪え 身体を切り刻め

本能のままに人を 生き物を

殺せ

赤き血を 形なき魂を

奪い取れ

身体が動く 頭が叫ぶ

命を刈り取れ 魂を奪え 身体を切り刻めと

殺せ ころせ コロセ・・・

血を啜り 内臓を喰い 命をむしりとれ

新しき 死の世界へと連れていけ

おれは死の使い 死神 地獄の使者

生きる者を殺し 死への世界へ連れていく

さあ殺せ

愛しき者を 憎むべき者を 親しき者を

恨むなら 今ここにいて 自分を恨め

運命のままに 死んでゆけ

さあお前も・・・

一人 また一人 命を喰われ 死んでゆく・・・



## 第22話：疑惑（前書き）

グロい部分があるので苦手な人は読まないことをオススメします



## 第22話：疑惑

「くそ……！なんなんだこいつは！」

ギルドSTEM・ファルクは肩で息をしながら目の前にいる【化け物】を見ている。

化け物の容姿は人間。だが体色はレーヴェルシティの人間を多く殺しすぎて赤に染まっている。だが瞳の色は黒。

……レンホウだ。

だがいつもの彼とは様子が違う。目は虚ろ、長刀には魔導が通っている。言葉遣いは子供のような。

「クスクス……死んで おじさん」

蓮崩はギルドに跳びつき刀を振り降ろす。ギルドは持っていた自分の愛武器・【鬼爪】を装着し刀を防ぐ。振りを止められたそれに通った魔導は 衝撃。ギルドは後ろに吹き飛ばされた。

「逃がさないよ クスクス……」

すぐに蓮崩は足の裏に衝撃を放ち反動で飛んできた。

ギルドは避けきれず刀に斬られ中から衝撃を放たれ中の臓物をまき散らし絶命した……。

「ハハ……。ハハハハハハハハ」

狂ったように笑う蓮崩の周りには体の原型をとどめていない肉塊が転がっている。目には光が無くただ赤とは正反対の青空を見つめている者もいれば蓮崩を憎むように見ている顔もある。

「……！ つつ……！」

強烈な頭痛がおき俺は意識をとりもどした。

「ここつて……。！！ ギルドSTEM……」

愕然とした。両膝を折り血溜まりの地面についた。

ピチャリと音が鳴り我にかえり、声に出し頭の情報を整理する。

「城から帰って、ハウスに行つて依頼受けて草原行つて……」

それ以降の記憶がない。【欠落】ではなく【無い】のだ。だが【無い】部分は頭に響く声が説明する。

（そこからは僕が出てきて竜を殺したんだよ？　だけど、殺したりないから町に来て全員殺したよ　楽しかったあ……。最後の人が一番強かったなあ。これが君の本当の性格でしょ？）

違う

（君は人を殺したくて殺したくてたまらないんだ。だから僕が手伝ってあげたんだよ）

違う　違う　ちがう　ちがう　チガウ　チガウ

（どう？　血の臭い。人を斬った感触。血の暖かさ）

実際には俺が斬ったわけではないが斬った感触は体に残っている。刀が骨に食い込みそれを削った感触。骨すらも切るほどの威力をもって振り降ろした力。すべてが……

絶望した……。人を殺した。人を斬った。

「ハハハ……」

乾いた笑いをこぼしふらつきながら家に戻る。

「ただいま……」

「お帰り　どうだった？　依頼」

そういう会話がつい昨日までであったのに。もうその声は聞こえない。

風呂に行き体についた血を洗い流す。血は落ちるが罪は洗い流せない。鼻を衝く鉄のにおいがする。

「くそ野郎……」

シャワーを浴びながら呟く。

「……　そうだ！　【アーバス】。あいつの家は離れているから大丈夫のはずだ」

俺はシャワーを止め服を着替え、情報屋の家【アーバスの館】に走った。走るといっても道を走れば死人を踏みつけて歩くことになるので屋根の上を魔導をかけて跳んだ。

館に着いた俺は急いで中に入りアーバスの安否を確認する。

だが、いややはりと言うべきだろう。中はひどく荒らされていた。そして、残骸の上には命なき老婆が静かに寝ている。

そんなとき頭から声が聞こえた。

（あれ？こんなところに家があつたんだ。知らなかった）

「おまえが殺したんじゃないのか？」

（僕は町外れまでは来てないよ。こんな家知らなかったもん）

声の主は本当に何も知らないらしい。ならなぜアーバスが死んでいる？ 不思議に思いアーバスの死体に近づく。

変わった様子はない。が切り傷が嫌でも目立つ。まるでメスで切られたような傷が。

「メス？メスを使うのは医者だよな？もしかして・・・」

考えを巡らせていると後ろから声が聞こえる。

「そのもしかしてですよ。レンハウ君」

## 第23話：命（前書き）

このごろはブラックな内容ではありませんが呼んでくれたら嬉しいです。

## 第23話：命

「くっ！」

体を捻り、飛んでくる無数のメスや注射器を避ける。

「ハハハ！楽しいなあレンホウ君！」

だいぶ前にプエルを診てくれた医者ゼシルド・クロスと俺は今戦っている。事の発端はついさっき。

「そのもしかしてですよレンホウ君」

アーバスの死体を見ている俺の後ろから声が聞こえた。

「その声、ゼシル……」

振り向こうとしたが首、それも頸動脈あたりにメスが当たり振り向くのを止めた。

「そう。ゼシルド・クロスです」

何か様子が違う。貴族のような話し方だ。そう思っていたら後ろにいるゼシルドは口を開いた。

「あなたのおかげで町の人間が殆ど死にました。ありがとうございます。私の国が建ちましたら右腕になることを許しましょう」

「それはどうも。歓迎いたみます。なんて言うと思ったか？町の人間を皆殺しにした後、国をたちあげるだ？」

静かに怒りが沸き上がってくる。我慢できるのはもはや数分だろう。

「ええ。確かに私は国を造りますよ？私の国を」

我慢の限界だ。そう思い俺はゼシルドを外へ蹴り飛ばした。そして、俺もすぐに後を追う。

すさまじい轟音と共にアーバスの館が崩れた。

「能力変換 召還 トリス！」

合剣を出し曲刀に変化させる。そして奴に切りかかるがゼシルド

はメスを指の間に挟め投げつけてきた。

とまあこんな感じだ。

「能力変換 雷 トリス」

魔導を雷に変化させ飛んでくるメスに当て止めようとする。がゼシルドは

「無駄ですよ。変換 操作 アイラ！」

ゼシルドが言霊を発するとメスはまるで生き物のような動きをしながら俺に近づいてくる。

「能力へんか

「アイラ！」

魔導を変化する間もなくスピードを上げたメスが喉に突き刺さる。それ以外のメスは曲刀で弾いた。

「ガホッ！・・・ろ・・・どっ・・・って」

喉を刺され声が出せなくなった。このせいで戦力が下がるのは言うまでもないだろう。

「これで魔導が使えませんか。さあ私を足蹴にした罪は重いですよ！」

激痛に耐え喉に刺さっているメスを引き抜き体勢を整える。もう声は出ずヒューヒューという音しかでない。

「変換 光 アイラ！」

周りの光が弱まりゼシルドの周りに集まっていく。そして次の瞬間。

光が俺の腕をすり抜けた。だが所詮は光。物質だから当たっても痛くはない。

「知っているですよレンハウ君。君は魔族だ。だから光は極端に嫌いなはず」

何を言っているんだ？俺は魔族ではない。大体、魔族だったら俺はおまえをすぐに殺す！

そう言いたい喉を切り裂かれているために言えない。

「さあ行きますよ！」

『我に託されしは命を育む花。等しく光を放ち我が敵を浄化せよ』  
彼の後ろに巨大な花（薔薇だろうか？）が出現した。そして花びらが開き中から光が飛び出してくる。

奇跡的な反射力で一つを避けるが無数の光は俺を襲い触れた直後に爆発がおきた。俺は全方向の光の餌食になった。

（痛ってえな……。間違いなく死確定だな）

そんなことを考えていても光は容赦なく俺を襲う。実際普通の人間なら死ぬだろう。【普通】の人間なら……。

「ハッハッハ！愉快だ【疾風のレンハウ】と言われた男をこの私が殺した！ハッハッハ！」

相変わらず馬鹿笑いを繰り返すゼシルド。だが蓮崩にはその笑い声は耳に届いていない……

ゼシルドは近くに歩み寄り、焼けた髪を掴み頭を上げる。もはやその目には光がなくなったただ屍になった少年がいた。名を蓮崩、年は14、異世界の少年、クローマー。

「ハッハッハッハッハ！」

ただ笑う男に殺された悲しい少年。だが少年は町一つの間人を殺した。そして死ぬことでその罪は消えた。悲しき少年よ。果て無き夢を見よ……

ドクン・・・

ドクン・・・

ドクン・・・



## 第23話：命（後書き）

『小説家になろう』秘密基地』にイラストが載っております。  
『ひい』様と『更紗ありさ』様が描いてくださりました。本当に有  
難う御座います！！

## 第24話：決意

「ここ、どこだ？」

周りを見渡しても何も無い真っ白な場所。だが足場はある。俺はゆっくりと歩き出す。

「ここって死の世界か？」

軽く笑いながら呟く。死の世界なら嬉しい。俺は人を殺しすぎた・。。

「人を殺したのは君じゃなくて僕さ」

奥から声が聞こえる。その声には聞き覚えがあった。以前頭に聞こえた声。急に不安になり声のもとに走った。

「やあ。こうして会うのは初めてだね」

「よ。俺は二回目だなあ蓮崩」

そこにいたのは俺の精霊【トリス】、そして身体を乗っ取り町中の人間を殺した奴が立っていた。姿形は俺と同じ。

「あれ？驚かないんだ」

「今更驚いてもな。前にトリスに会ったときは驚いたけど」

「そりゃ驚くだろうぜ？いきなり自分が目の前にいるんだからよ」  
会話をしたことで不安や恐怖が消えた。俺は二人に聞く。

「ここってどこなんだ？死んだ後の世界とかか？」

「ちよつと違う。生と死の狭間？かな」

「なんで疑問なんだよ！いいか蓮崩。生き返りたきゃ俺たちを倒せ。違うんなら俺たちが殺す。さあ選べ」

なんで死んだ後なのに殺されなくちゃいけないんだよ！ 軽いツッコミを心の中でいれ考える。

（このまま死んでもいいけどな……。聖、悲しむよな。ん？なんであいつなんだ？？ま、死ぬのはゴメンだな！）

頭を整理し出した答えは【生き返る】こと。

「とりあえずは生き返る！それ以外は後で考えるさ」

「後悔しない？」

声の主（名前がないので）は確認してきた。

「ああ」

「じゃあ、イクぜえ！」

一足先にトリスが走ってきた。狭間の世界じゃ魔導は使えないだろう。そう思い拳を握り近接戦に備える。

「さあ殺してやるぜえ！」

勢いをつけた拳を軽く避け跳んできたトリスの懷に潜り込み腹に膝蹴りを当てる。

案の定。地面に足をつけていないため上に飛ばされるトリス。追いつきかけようと跳ぶが、

「僕を忘れないでほしいね。やああー！」

声の主が跳び蹴りをしてくる。俺は体を捻りなんとか防御したが足場がないため後ろに跳ばされる。

そこを待ちかまえていたかのように上にいるトリスが両手を握りハンマーのように振り降ろす。俺は避けられず下に叩きつけられた。

「二人相手はキツイな・・・」

「俺たちを取り込まねえとヤベエぜ？元の世界に戻ったとき」

「取り込む？どうということだ？」

不思議に思いトリスに聞き返す。

「いいか？精霊は体に宿ってる。わかるか？つまりお前はこっちの世界に来た時点で精霊を宿した。だから元の世界に戻っても俺は消えねえ」

「じゃあ、おまえは消えるのか？」

俺は声の主に話を振る。

「僕を消すのは君の気持ち次第だよ？僕は君の本性なんだから。と言っても人間の本性は実際自分も解っていない人が多いからね」

声の主はやれやれと言った感じで話す。

「話を戻すぜ？おまえが帰れても俺は残る。そこまで話したよな？」  
俺は軽く頷く。

「そうなるとお前はたまに意識がなくなり俺ができて人を殺す可能性がある。あくまで可能性だからな。だから一度死んで狭間の世界に来て本人同士が直接戦い、俺を負かして取り込めば解決ということだ。わかったか？わかったなら続きだ！」

長い説明が終わり戦闘は再開した。とりあえず俺はトリスを倒さなきゃいけないんだな。

「やってやる・・・」

すさまじいほどの闘気を両手に溜める。そしてトリスに向かって走り出す。

「なんだあ？」

「喰らえ！ガイル直伝【闘碎狼牙】（とうさいろうが）！！！」

両手に集めた闘気をトリスの腹めがけて打ち込む。この技は内蔵にも多少のダメージを負わせる技。つまり多対一の状況では使える技らしい。

「ゲッホッ！！油断したぜ・・・！！！」

トリスの動きが急激に遅くなった。当たり前だろう。どんなに硬い鱗をもった竜でも内蔵までは硬くはない。つまり内蔵にダメージを追わされては早く動くこともできない。

「くそっ！やあ！はっ！」

声の主は不規則な早さの攻撃を繰り返しているがもはや1対1はするだけ無駄だ。俺はすべてを捌き足払いを当て相手を転ばせる。

「勝負あつたな」

仰向けに倒れた声の主の首に拳を寸止めし勝負は終わった。

「まさか・・・俺たちに勝っちまうとはな。ゲホッ」

トリスは少し残念な顔をして咳込んでいた。少しやりすぎたか？おめでとう。レンハウ生き返れるよ」

微笑みながら声の主は話しかけてくる。よくよく思えばこいつも人間なんだよな。ていうか俺だし。

「ま、力には溺れんなよ！」

トリスがそう言うのと二人は光になって俺の中に入った。

「ま、決意は固まったな。帰るか」

俺は光になり消えた。だがふと思ったことがあった。

「そついやなんで死んだのに生き返れるんだ？」

その疑問を残し俺はゼシルドしかないレーヴェルシティへと戻った。

## 第25話：再会

「ん……」

狭間の世界から戻り俺は目を覚ました。正確には生き返った。

「生き返れたな……。！！イデデデ！！！」

動こうとしたら体が動かない。そして強烈な痛みが体中に走った。死後硬直だ。

「こんなに痛てえもんなのか……」

バキバキと骨がなる音が体に響く。正直かなり痛い。

「さて、と。ゼシルドを探すか」

体がほぐれたところでゼシルドを探すことにした。周りを見渡すが彼は見つからない。目を瞑り気配を辿ると、だいぶ離れた場所にいることがわかる。

「大通りか。……よし！」

足元に置いてあった曲刀を手に取り俺は大通りに走った。

大通りではゼシルドが死体を漁っていた。

「なるほど……。これはこうなっていたのか」

「あんた医者だろ？なんで体の構造がわからないんだ？」

原型がある死体を解剖している彼に問いかけた。傷や喉は生き返る際に治っていた。

「なぜ君が！？わたしが葬ったはずなのに」

「お生憎。死んでないんだなー実は。あれはダミーさ。あんたに死んだと思わせておくためのな」

俺はダミーと言っているがあれは間違いなく【俺 本人】だ。集中力を消すことができれば魔導も弱くなるだろうと思つてのこと。

「そうですか……。ならばまた、今度こそ殺します！」

『我に託されしは』

「ふっ！！！」

詠唱を言い終える前に俺は片手を前に強く押しだし衝撃を放った。手から放たれたそれは彼の一步前の道を削った。

「なるほどね。取り込めば【無】に関係するものを無条件に出せるのか……」

トリスと本性を取り込んだことで体が軽くなり、力すべてが強くなった。

「バカな！！！」【取り込み】は正式な儀式がある。それを無視して取り込みを行って成功の確率は……3%なのだぞ」

ゼシルドは驚きの表情のまま動かない。それを好機に身体強化を施し彼の背後に回る。

「じゃあな。ゼシルド・クロス。プエルを診てくれて……ありがとう」

最後に感謝をして、俺は彼の命を奪った……。

「自我があつての殺しは初めてだな」

そう。俺は実際、意識がない時に人を殺していた。だから自分で殺すのは初だ。だが、後悔も絶望もない。これが【生きる】ということだから。

「死体を片づけないとな。よつと」

クロームハウスの屋根に乗り俺は詠唱を始めた。

「我が命に従いて現れたるは闇を司りし者。命なき者を深き地へと墜とせ」

詠唱が終わり影という影から無数の悪魔（体長30cm全身黒で槍を所持）が表れ死体を吸い取り一人吸い取ったら地面に消えた。そして染み着いた血までもを吸い取り悪魔は消え、町は急にガランとなった。

「とりあえず家に帰るか……」

そう言い俺は家へ帰った。

玄関先で異変に気づいた。家の中が光っている。変だと思い急い

で家に入る。そして目に入っ たのは……青い短髪、血のような瞳、プエル。

そして緑の髪に瞳。だが頭に耳が付き、目は狼のようだ。さらに尻尾まで生えている。一瞬目を疑ったがガイルだった。

「ただいまっ レンホウ」

「うむ。帰ってきたぞ」

明るく返事をするプエルと爺さん口調で話すガイル。

「よ。おかえり。こっちは大変だったけど……」

「ごめん。町はまた新しく作り替えよつ。今は……」

「「ただいま」」

なぜ知っているのだろうか？町の人間が死んだ（殺された）ことに  
まあ、今はとりあえず……。

おかえり。



## 第26話：運命

『一難去つてまた一難』

その言葉は聞いたことがあるでしょう。運命とは実に珍しいものです。

俺はプエルの母親のことを静かに聞いていた。ガイルはとても綺麗だったと言っていた。だが、俺は実際見たことがないので聞いてもわからなかった。

『百聞は一見にしかず』とはこの事を言うのだろう。

プエルの話が終わり俺たちは外に出て体内の空気を入れ替えた。

「ま、母親に会えたんだから良かったよな？」

「そうじゃな」

「そういや、なんでお前はそんな格好なんだ？不思議で仕方がねえんだが……」

二人が帰ってきたときから不思議でしかたなかった。頭には犬のような耳、瞳は狼のような目、そして尻には尻尾。

「魔界に戻ると強制的に元の姿に戻るらしいのじゃ。しかし戻った方がいいが今度は人間の姿に戻れなくなってしまうての……」

「いや……。答えになつてねえ！お前は【獣人族】なんだろ？獣人族ってなんなんだ？」

「獣人族は種類が多すぎて一概にこれとは言えないんじゃないよ」  
ガイルの説明がやけに懐かしい感じがする。

そんな意味もないことを話をしていたらプエルが口を開いた。

「ねえ、この町にはもう私たちしかないんだよね？」

おもむろにプエルが話してきたことは不思議でしかたなかった。  
「そのはずだけど……。なんでだ？」

「だって前にいるじゃない？人が」

俺とガイルは前を向いた。さっきまではプエルの方を向いていたために前を見ていなかった。

「あれは誰じゃ？」

前には紳士風の老人がいる。右手には杖を持っている。

「初めまして。ガイル様、プエル様。そして蓮崩様」

紳士風の老人は俺たちの名前を呼び微笑んだ。なぜかその笑みには違和感を感じる。

俺たちはすぐに戦闘体勢に入った。

「拳を下ろしてください。貴方がたと戦うつもりはございません」

「じゃあ、あんたの体から出てる殺気はなんだ？」

俺は問いかけた。事実、何の訓練もしていない人間は卒倒するくらいに殺気だ。

「ああ。それは……」

男が何かを言おうとした瞬間、体が動かなくなった。それは他の二人も同じだった。

「無傷で連れてこいとの命令ですので」

奴の殺気が急激に上がった。呼吸ができそうにない。いや、呼吸をすることですら隙を見せるようだった。体の硬直を気力で解き俺たちは後ろへと逃げた。

「逃がしませんよ。特に蓮崩様は」

何故？ そんな考えが頭をよぎった。

「なんなのあいつ！？」

「わしが知るかレンホウ！お主は？」

「知らねえよ。第一知ってたらお前等に言うたらろ！」

かなりのスピードで逃げながら会話しているが実際は余裕がなかった。すぐ後を奴が追ってきた。

「仕方ありませんね……。実力行使でいきますよ！」

そう言った瞬間、奴は一步で目の前に来た。

「なっ！……！」

「すみませんが任務なのでね。はあ！！！！」

奴は杖を俺の頭に突きつけ衝撃を放ってきた。もちろん俺は避けきれず直撃した。

「レンホウ！！」

プエルの声が聞こえる。俺は頭を軸に中空を縦に1回転した。なんとか着地したが脳を揺らされたためひどい吐き気におわれた。  
「オエエー！！！！ゲホッ！！ゴホッ！」

かなり胃液を吐き俺は意識が無くなった。

## 第27話：帰還（前書き）

ようやく最初の頃からの話が繋がりそうです。  
読んでくれた皆さんには感謝しています。

## 第27話：帰還

「…ウ。……ホウ。レンホウ！」

誰かに呼ばれ目が覚めた。ついでに言えば気分は最悪だ。両手は後ろで縛られ、足はあぐらをかかせられた状態で縛られ身動きがとれなくなっていた。

「レンホウ起きた？大丈夫？」

「頭がすつげえフラフラする。多分まだ脳が揺れてる……」

俺を起こしたのはプエルだった。プエルも同じように縛られている。そして、奥にいたガイルも。

「それにしても此処はどこじゃ？空気の匂いがいつもとは違う。魔界の空気とも違うようじゃし……」

「うん。ホント。なんか、自然がないような匂い」

二人は不思議そうに周りを見ているが俺は頭ではすでにわかっていた。

「ここ【日本】だ」

「ニホン？それって……」

「ああ。俺がいた国だ。懐かしいな」

ようやく帰ってこれた。そう感じたのも束の間。奥の扉からさっきの老人が歩いてきた。

「お目覚めですか？蓮崩様」

（見りゃわかるだろ。この拉致野郎）

小さく呟き奴を見た。ところが奴は目の前にはいなく、背後にいた。

「君たちからはどんな物が出来るのでしょうか。楽しみです」

男はそう言う縛られている俺たちを解放した。そのとき逃げるという考えは思い浮かばなかった。

「ねえ。あなたの名前を覚えてくれない？」

そう聞いたのはプエルだった。いつになく力強い瞳が老人に突き

刺さる。

「そうでしたね。私の名はキヨウリム・ネルスです。以後お見知り置きを」

（知る必要はないがの……）

ガイルが呟いた。本人は聞こえないように呟いたらしいがしつかり奴……キヨウリムに聞かれ睨まれていた。

「名前ついでに教えてくれキヨウリム。なんで俺たちは日本にいる？そもそもここは日本か？いや、まず何故俺たちをさらう？それになんのメリットがある？」

矢継ぎ早に質問する俺にキヨウリムは少し慌てて

「ちよ、ちよっと待って下さい。質問が多すぎます。まず一つお答えしましょう。『ここは日本か？』ええ。ここは正真正銘あなたのいた世界【日本】です」

何故？ 驚きよりも疑問が先に出た。俺は感情を消したような声で聞き返す。

「どうやってこっちに来れた！」

「どうしてだと思えますか？」

「質問に質問で返すな！答えろ……。答えなければ……」

「答えなければ？どうします？私を殺しますか？いや、『殺せますか？』」

いちいち癪にさわる言い方をしてくるキヨウリム。だが実際俺は奴を殺すことが出来ない。少なくとも『今』はまだ……。

「まあ。いいでしょう。さあ、こちらへどうぞ」

そう言われて俺たちは目の前には壁しかない場所に集まった。

「ここは壁しかないが？」

「これは【魔導の壁】です。普通の人には只の壁ですが『我々』のように魔導が使える者にとってはまやかしの壁です。さあ」

言われるがままに壁に向かって歩き出す。ぶつかると感じた刹那【それ】はすりぬけ目の前にはこの世の物とは思えない。いや、思いたくない光景が目に入り込んだ。

「どうしたの？レンホ……。イヤアアアアア！！！！！！」

「プエル！どうしたのじゃ！？……な」

この後、俺たちはなんとか逃げきり俺の家へと向かった。

## 第27話：帰還（後書き）

このごろは新しい小説を考えています。  
もし投稿したら読んでくれたら感激です。いつになるかわかりませ  
んが……



第28話：家族（前書き）

久しぶりに聖が出てきます。

## 第28話：家族

「はあ、はあ……」

かなり走り、疲れきった体を休め息をととのえる。

「さっきの【あれ】はなんじゃ？」

ガイルは息切れをせず俺に聞いてきた。【あれ】とは壁の向こう側の【人体実験場】だった。

そこでは魔導を習得した人を拘束しそのまま不思議な機械に生きたまま入れ出口から出てくるのは一つ一つ違う形状の武器。

「まず、【奴等】に捕まれば死ぬな……」

「そうだね。とりあえずは休む家が欲しいな」

「わかった。俺の家に行こう」

そう言い俺は二人を案内した。

「ここだ」

家を指さすと二人は

「まあまあかな」

ふざけんな吸血鬼。自分の家（城）と比較すんな。

「小さいのだな」

この野郎……。悪かったな小さくて。

軽く家をけなされたが軽く流し家の中に入る。そこで俺は不思議な光景を目の当たりにする。

「あら？あなたは誰？」

話しかけてきたのは家にいた人。

「……え？」

俺は言葉が出ず家を出た。

「なんで出たの？ここがレンホウの家なんでしょ？」

「そのはずなんだけ……ど」

家の入り口に付いている名字が書いてある掛け札を見たら【高橋】

と書かれていた。

目を擦り見直しても【高橋】。不安になり聖の家に行くことにした。

（聖、いてくれればいいけど）

そう願う俺たちは聖の家の前にいる。ちなみにさつき実験したことでだが、こちらの世界でも魔導は使えた。ただし使うと通行人になり見られるが……。

それは別にどうでもよく俺はインターホンを押す。

ピンポン

久しぶりに聞いた音がとても心地よく思えた。そしてガチャリという音が聞こえ中から現れたのは腰までかかる黒髪。そして見た者を吸い込みそうな漆黒の瞳。その姿は紛れもなく里崎 聖そのものだった。

「誰ですか？」

聖は呆氣にとられたような顔をして俺に問いかけてきた。

「ずいぶん言い草だな……」

「どなたかわかりませんが取り合えず中へ」

そう言われ俺たちは中へ入った。

玄関に入り少し歩き右にあるリビングに入った。次の瞬間

「蓮崩！……」

聖が勢い良く飛びついてきた。なんとか受け止めたがバランスが後ろに崩れ倒れた。

「痛って……」

「あ、ごめん……」

すぐに聖はどけ隣に座った。

「レンホウ……。その者は恋人か？」

いきなりガイルが質問をしてきた。普通10才では聞かないような質問を。

「違う！！これは幼なじみだ」

「レンホウ……。本当？」

プエルが殺気を殺し話しかけてくる。はつきり言っただけかなり怖い。  
「本当……です。はい」

恐怖を隠しなんとか答える。聖は不思議に思ったのか俺に聞いてきた。

「ねえ、あなた達は誰？」

「あたしはプエル。プエル・ド・シエルよ。吸血鬼だけどね」  
紅い眼が真っ直ぐに聖を見る。

「吸血鬼？トランシルバニアにいと云われている？」

「とらんしるばにあ？なにそれ？」

聖は困惑の表情で俺を見ている。

「どうということ？」

「それは後で説明する。こっちのちっちゃいのは……」

「ガイル・ジェラルドじゃ」

いつの間にかガイルは人間の姿に戻っていた。

「この子は？」

「それもまとめて説明する。そういえば俺の家が別の家になってたぞ？」

聖に聞くと別段驚いた様子も見せずに口を開いた。

「そう。あんたがいなくなってから急にみんながあんたのことを忘れたの。会ったことが無いみたいに」

「どうということだ？」

「さあ？取り合えずあなた達は私の家族になったほうが良いと思うの」

「なんでだ？」

突然の提案に3人は混乱した。

「誰も覚えていないんだから。それに家もないんでしょ？蓮崩は家族もいないんだから久しぶりに【家族】になって日常を楽しんだら？」

「そ…うだな」

「じゃあ、プエルさんとガイル君の名前を変えよう？里崎に合うようにね」

急に明るくなった聖は名前を考えていた。このときは知らなかった。聖の両親が事故に逢い亡くなっていた事に。

## 第29話：孤独（前書き）

少しづつ終わりに近付いています。こんな小説を読んでいたとき本当に有り難うございます。

## 第29話：孤独

「じゃあ、プエルさんは【里崎 鈴】。ガイル君は【里崎 翔太】ね」

3時間かけて名前が決まった。俺はそのままの【里崎 蓮崩】になった。

「そういえば聖ちゃん」

プエル……いや鈴が口を開いた。

「なに？」

この二人はすっかり打ち解けたらしい。ガイル……翔太は人見知りが激しいのか打ち解けることはない。

「魔導を覚えてみない？痛みを伴うけどね」

「うーん……。やってみようかな？」

「ダメだ!!」

聖には教える必要がない。その気持ちで口を開かせた。

「な・なんで？」

「何でもだ。お前が知る必要がない。下手に覚えてついてきても邪魔だ」

冷たいようだが仕方がない。お前には傷ついてほしくない。

「どうしても覚えたいなら俺と闘え」

「何を言い出すのじゃ！？無理に決まっておる」

ガイルが胸ぐらを掴み俺を怒鳴りつける。

「……わかった。闘う」

聖は俺を見てはつきりそう言い放った。

「じゃあ、あそこに行くぞ。あそこなら広いし、誰も来ない」

聖は小さく頷き俺達はある場所へと向かった。プエルとガイルはあわててついてきていた。

「あたしが勝つたら魔導を教えてもらおうよ!!」

「ああ……。【勝てたら】な」

これからは誰とも関わらない。なぜかその考えが頭をよぎった。  
「待って！能力変換 癒し ブルー・レスト」

プエルは聖に近づき左足を癒した。元々、聖にあった持病を治してくれた。確かにこのままでは聖が不利だ。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。（身体強化もかけておいたから。絶対勝つてね）」

プエルは小さく呟いた。その声は聖だけに聞こえるほどだった。

「（うん。絶対勝つよ。ありがとう）いくよ！蓮崩」

そう言つと聖は飛び込んで来た。ちなみにここは昔、公開処刑場でかなりの広さだ。俺と聖は間合いを結構空けていたにもかかわらずすぐに間合いを消してきた。なぜかこの時俺は冷静だった。

彼女は顔に拳、次は右足で足払い。最後に俺が浮かんだところに蹴りを入れてくる。つもりだった。

俺はすべてを避け後ろに跳び間合いを空けた、がまた間合いを詰められ離れることが出来ない。

「攻撃してこなかったら勝てないよ！」

「プエル！」

俺は聖の攻撃を避け、ときには捌きながらプエルを呼んだ。

「な・なに？」

「癒しの準備をしておいてくれ。この勝負はもう、【終わらせる】……」

そう言つて俺は攻撃に移った。聖の腹に衝撃を当て、吹き飛ばされた彼女をすぐに追いこし背中に衝撃を当てた。

「ぐっ！」

聖を襲う痛みはかなりのものだろう。後ろに跳ばされながら後ろに衝撃を当てられれば内臓にもダメージが届く。

聖は腹を抑え、うずくまった。本来なら勝負はついている。

「聖。俺は【終わらせる】と言つたんだ。その言葉の意味、わかる



な……？」

「嘘でしょ……？ねえ！レン

メキッ！

彼女の骨が悲鳴をあげた。そして彼女自身は白目をむき痙攣している。それを見た二人は聖のもとへと駆け寄った。

「ブルー・レスト……！」

必死に魔導をかけるプエル。ときより、俺を恨めしそうに見るが俺は気にはならなかった。

「なんで……」

？

「なんでここまでする必要があるの！？聖ちゃんは幼なじみでしょ？あなたには【いたわり】の気持ちや【可愛そう】という心はないの……！」

プエルは顔を大粒の涙で濡らしながら問いかけてきた。

「じゃあ、可愛そうだから手加減しろと？手加減してもこいつは諦めない。だから……、だから【絶対的な力】を見せつけたほうがいいんだよ」

俺は冷たく言い放った。プエルは聖を癒しながらまた聞いてきた。

「こんなの……、こんなの！レンホウらしくない……！」

「らしくない？はっ！そうか……？俺は俺だ。みんな俺の本性を知らないんだから……」

もはや俺を縛り付ける物は何もない。俺は不思議と冷静だった。

突然ガイルが俺の胸ぐらを掴み飛びついてきた。もちろん俺は後ろに倒れた。

そして次の瞬間ガイルが拳で頬を殴った。口の中に血の味が広がる。口内を切ったのだろう。

「お主は……！それでも人間か……」

「当たり前のことを聞くな。魔界に行くことができない俺が人間以外の何に見える？」

掴んでいる腕を払いのけガイルは後ろに跳んだ。俺はゆっくりと

体を持ち上げた。

「わしと戦え！レンホウ。ただし【勝負】ではなく【死合】だ。どちらかが死ぬまでじゃ！！」

今まで見たことのない眼、強い意志。憎しみの眼ともいえる。

「……わかった」

両手を合わせ中空に曲刀を出し、それを手に取り構えた。

「強くなったな……。合剣を変えた状態で見せるとは」

ガイルは合剣を大剣に変化させた。

「行くぞ……」

「ああ……」

死合が始まる！

### 第30話：生きる

「死閃煉獄衝！！」

「トリス！！」

衝撃がぶつかり合い二人の真ん中で弾けた。

俺は前に跳び足の裏から衝撃を放ちそこから更に低空に跳び曲刀をガイルに振り下ろした。

「ふっ！空衝連激！！」  
くっしょうれんげき

だが、ガイルは俺が振り下ろしたそれを大剣の腹で受けそのまま攻撃に転じた。刀を押し返し上に跳び超重量の大剣で何度も切りかかってくる。だが、俺はそれをすべて捌き着地した。

「そんなものか？ガイル」

「まだまだ……だいちみやくどう大地脈動」

大剣を地面に叩きつけ直線状に大地が流動する。

「ふっ！」

俺は前に衝撃を放ち、襲ってくる土を吹き飛ばした。

「……こんなものか。もういい。……【殺す】」

身体強化を体にかけて一瞬でガイルの背後をとる。これで終わりだ。思ったがガイルの周りが歪み後ろへ跳び退いた。

「おぬし相手にこれは見せたくなかった……。恨むなよレンホウ」

そう言つと周りの歪みが更に強くなり闇が生まれた。そしてガイルは完全に闇に飲まれた。

「なんだ……？」

闇から出てきたのは四足歩行の動物。だが不可解なのは頭が3つあること。そして頭はそれぞれたてがみ鬣に、炎・雷・氷を纏っている。そして【それ】の上にはガイルが乗っている。

「できれば使いたくなかった。この……【ケルベロス】だけは」

そう言つとガイルは飛び降り横腹をポンポンと叩いた。言い忘れていたがこいつはかなりデカイ。

『グヴウウウ……！！ガアアアアオオオ！！』

この生き物の対策を考えてる途中にこいつは襲ってきた。突然の事だったがなぜかしっかりと判断がついていた。前足の右爪を避け、続いて左の爪は曲刀の腹で受けた。

「今だ！！死閃煉獄衝」

ケルベロスとの戦闘に集中している俺に向かってガイルは真空波を放ってきた。

俺はそれを避けずケルベロスの前足に当たるように移動した。

狙い通り。

真空波は見事にケルベロスの足に当たり前足を切り裂いた。切り裂かれたそいつはすさまじい轟音を響かせ倒れた。

「しまっ……」

「じゃあな。ガイル。特別に殺さないでやる」

そう言い捨て一瞬で背後に回った俺は首を支点に脳に軽く衝撃を与えた。

ガイルは崩れるように倒れたが襟を掴み止めた。そしてプエルのところに投げつけた。

「頼むぞ。プエル」

「どうするの？これから」

不安の表情を浮かべたままプエルが問いかけてくる。

「あいつらを殺してくる……。それが終わったらまた一緒に暮らすぞ」

そう言い残し俺は例の場所へ跳んだ。誰にも頼らずたった一人で……。

### 第31話：苦戦

3人と別れて数分後、俺は港まで来ていた。

「たしか、4番倉庫だったな」

俺が捕まっていたのは4番だった。辺りを見回し倉庫を探す。

「これより先はいかせん！」

いつの間にか目の前には外見20代の男が立っていた。

「……誰？」

「名乗る意味はないな。これから死に逝く者にはな！」

そう言つと男は持っていた大鎌を横に薙ぎ、炎球を放ってきた。

「な……」

炎をなんとか避け体勢を整える。

「よくかわしたな……。だが、これならどうだ！」

男は体ごと鎌を回転させ炎球をいくつも放ってくる。

「器物破損の何者でもないな……」

避けれるものは避け、無理なものは衝撃を当て相殺した。間合い

を詰めようとするがいくつもの炎が行く手を塞ぐ。

「くそ……。 (ん？ 気配が増えた？) 」

明らかに増えた気配は俺に殺気を向けている。

「ようやく来たか。遅かったな」

「悪かったわね」

男の隣には男よりは少し若い女性が立っていた。片手には弓を携えて。

「あんなのを殺せないなんてね。腕、落ちたんじゃない？……ふっ  
！！」

そう言つと女はどこから出したのか矢を引き絞り、射ってきた。

「のわっ！！」

なんとか後ろへ跳び、避けるが矢は地面に当たるなり弾け風に変わった。

予想もしない突風が俺を襲い更に後ろへ吹き飛ばす。  
吹き飛ばされながらも地面に掌を当て衝撃を撃ち、その反動で体を戻す。

「【炎の大鎌】と【風の弓】か……」

なんとか打開策を考えるが……。

「そらそらそらぁー！！！」

「まだまだー！」

炎球と矢が絶え間なく俺を襲うため思考が鈍る。

「ふうー……」

静かにしかし大きく息を吐き戦闘の型を変える。持っていた曲刀を消し体に身体強化をかける。

「なにかするつもりだ」

「そうね。なら、一気に決めるわ！」

男が正面から炎球を放ち、女は男のすぐ上から同時に矢を射る。

矢は炎球に飲まれ風になった。それにより炎は巨大化し目の前の俺を飲み込もうとする。

「ふっ！」

俺は躊躇することなく目の前の炎に飛び込む。そして炎に飲み込まれる。

「呆気無いわねえ……」

「確かに……」

二人は武器を下ろし炎から背を向けた。

「アツッ……」

俺は真正面から炎を突き抜け二人の後ろに着地。そして首に手刀を当て容赦無く首の骨を折った。

「悪いな……。死ぬわけにはいかねんだよ」

二人の屍を背に4番倉庫を目指す。

倉庫にたどり着き扉を開けるといきなり電気を浴びた。

「ほお……。気絶しなかったか」

「なかなか丈夫だね」

「電力不足」

地面を強く踏み電気を逃がし前を見ると真ん中には斧を持った30代の男。右には鉤爪を付けたガイルぐらいの子供。よく見ると鉤爪には電気が流れている。そして、左には感情がない20代の男が立っている。奇妙なのは両足にホルスターが付いている。

「誰さん？」

三人に問いかける。

「僕はカヤリ」

「俺はユログ」

「ノーラ」

「そ。俺はレンホ

自己紹介をしようとしたがノーラが何かを投げてきた。後ろへ跳び避けようと思ったが、後ろは壁。そのため上に跳び、避ける。が、地面から氷が飛び出してきた。

氷をなんとか避け着地する。

「攻撃失敗。次行動に移行」

ノーラの足のホルスターからは棒手裏剣が見えた。

「次は俺だ。オラアア！！！」

ユログは斧を地面に叩きつけ、直線上に衝撃を放ってきた。

「（大地脈動に似てるな）」

そう思い横に跳び避ける。そして衝撃を放つ。

「僕もいるよー！はっ！！」

カヤリが鉤爪を前に出し電気を放ってきた。

「ぐっ！」

衝撃はカヤリの爪で消されそれから放たれた電気は俺に直撃。

「攻撃」

「おらよっ！！！」

ノーラは棒手裏剣を投げ、ユログは上に跳び斧を振り降ろしてくる。

俺は合剣を出し二人の攻撃を防いだ。しかし棒手裏剣は空気中の水分を凝固させ氷の弾丸を撃ちだしてきた。

「カヤリ。稲妻」

「オッケー！」

ノーラが作り出した氷の弾丸はカヤリの稲妻の触媒に使われた。そして巨大な稲妻を俺に落とした。

すさまじい轟音が鳴り響いた。

「殺ったか!？」

「さあ……。でも殺したら【造れない】よ?」

「生命反応数3。……不覚」

あたりに静寂が訪れる。

「この野郎……」

瓦礫の中からはいでた俺は体勢を戻す。が、かなりのダメージが体に蓄積されていて立つことが出来ない。

「まだ生きてるじゃねえか」

「そうだね。丁度よく弱ってるし連れていこう」

「同感」

ノーラは俺を引きずりあの人体実験場へと入っていく。



### 第31話：苦戦（後書き）

いろいろな評価、感想をお待ちしております。

## 最終話：疑惑 真実 終結

引きずられて人体実験場に來た（來させられた？）俺は奥に投げ捨てられた。体を戻そうとするがさっきの稲妻のせいでうつ伏せのまま動けなかった。

「じゃ、【造る】か」

「そうだね」

奴等は【造る】と言っているが俺にはなんのことかわからなかった。

「造るってどういうことだ？」

「お前犠牲。魔導武器生成」

聞きたくない言葉が返ってきた。つまりここは魔導を使える人間を犠牲にして魔導が使える武器を造るらしい。

（やられてたまるかよ……）

3人に聞こえないように呟く。そしてなんとか立ち上がる。もはや意識すら危うい。

「まだ生きてた？」

「死んでたらダメだろ！というかまさか立つとはな……」

「……同感」

3人は驚きの表情を隠せていない。そんな中、俺は静かに詠唱を始める。

（『眼前に立ちはだかる敵を滅せ……。命奪われし亡者共！』）  
詠唱が終わると同時に俺は前に倒れ、動けなくなった。限界だった。

「なんだ？いきなり倒れたぜ」

「限界点突破……」

「精神も限界だったんだね。これなら造りやすいよ」

カヤリはそう言い俺に近づき、腕を伸ばしてくる。が伸ばしたそれは俺に当たる少し前で消滅した。

「カヤリ！離れる！」

ユログの声が響きわたりカヤリは体をビクツとさせ後ろに跳び退いた。だが消された腕が戻ることはない。

「なに？ あれ」

「魔導？ 確信……薄」

「あれが魔導か。危ねえ……が一気にかかれば怖くねえ！！！」

ユログの声が他の二人の行動のスイッチになった。3人は一斉に飛びかってくる。しかし、その後にあつたものは……。

静寂だった。

「ん……」

俺はいつの間にか寝ていたらしく体を起こし周りを見る。

「……？」

頭を軽くかき状況を把握する。前にいたはずのカヤリ・ユログ・ノーラがいなかった。

「まさか殺しちまったか？まあ、今更3人殺してもおんなじだけだな」

「冗談混じりの独り言を言い立ち上がる。そしてここに置いてある機械という機械をすべて破壊して、俺は外に出た。

倉庫を出ると夕日が目にしみた。あまりの眩しさに腕で目線を隠す。かなりの時間、寝ていたことを感じた。

「ん……。はあ……」

軽くのびをして息を吐く。そんなことをやっているとプエル達の上から降ってきた。もちろん俺は避けきれず3人に潰された。

「あ……。蓮崩」

「お……。ホントじゃ」

「何してるの？ あたしたちの足元で」

自分達が俺を踏んだことに対する弁明はなかった。

「……別に。と言うか、重い」

3人に乗られ俺の肺は潰れそうだった。3人は俺から降りると前を見据えていた。そこにいるのはキヨウリム・ネルス。

「おやおや。蓮崩様ではございませんか」

「「キヨウリム！」」

俺の声と聖の声がハモった。俺は驚き、聖を見て問いかける。

「なんで知ってたんだ？」

「あんたが消えた日の放課後にあったのよ。あたしを吹き飛ばすというおまけ付きでね」

怒りを押し殺したように話す聖に対して俺は怒りではなく疑問が溢れてきた。

（じゃあ、奴は世界を自由に行き来できるってことか？ だとしても、どうやって？）

考えているときにキヨウリムは話しだした。

「せっかくの研究所も壊されてしまいましたね。では、私は祖国に帰るとしましょう」

そう言い後ろを向くキヨウリム。だが

「そうだ。蓮崩様？」

「!？」

急に名前を呼ばれ、驚く。

「いずれあなたは真実の扉の前に立つでしょう。しかし、真実はあまりにも……」

何かを言いかけるキヨウリム。だが無理に聞こうとは思わなかった。そして奴の一言は……。

「奇妙ですよ？あなたの運命は少しずつ狂っていますのでね。」

そう言い残し彼は空間を裂き消えた。俺は、いや俺達はその後家族として暮らし始めた。

だが、未だに【真実】の扉は表れない。けれど、今はこの幸せを楽しもう。新しい【家族】と共に……………。

**最終話：疑惑 真実 終結（後書き）**

これで終わりです。

なんか歯切れが悪いですけど・・・

応援してくださった読者の皆様、本当に有り難う御座います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7453a/>

---

非現実の現実

2010年12月12日02時48分発行